

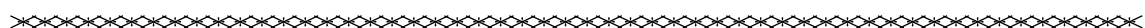
歯学部ニュース

令和5年度第1号（通算143号）

特集 入学を祝して
入学者のことば
歯学部ルネサンス

目次

入学を祝して	1
新潟大学歯学部長 井上 誠 医歯学総合病院副病院長（歯科総括） 多部田康一	
入学者のことば	4
小川 果澄・三友 湧斗・小笠原 舞・大関 彩月 金井 爽海・高橋 竜平・佐々木史佳・山口 萌絵	
特集2 歯学部生の活動	10
歯学部ルネサンス	
松澤耕太郎・脇本 和・西川 眞生・平山 純成・渡邊 開 新谷 愛・金子 裕太・今井真実子・斎藤 圭人・関 萌香 三浦莉里子・三浦 葵・出戸 千笑 令和4年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名 令和4年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名	
総務委員会だより	26
井上 誠	
部活動紹介	28
軟式テニス部 中鉢 歩夢 旭町水泳部 佐藤 亜紀	
研修医プログラムを修了して	30
プログラムA研修歯科医 岩本 佑耶 臨床研修 山田 果歩	
大学院へ行くこう	32
米本 裕貴・筒井 雄平・笹川 花梨	
学会受賞報告	35
三村 俊平・山田 貴大・大森 裕子・寺田 愛希 高橋 直紀・中島麻由佳・辻村 恭憲・黒川 亮	
診療室・分野紹介	43
歯周診断・再建学分野 教授 多部田康一 摂食嚥下リハビリテーション学分野 辻村 恭憲	
素顔拝見	49
平井 秀明・都野さやか・山本 徹	
論文紹介	52
口腔病理学分野 山崎 学	
新潟歯学会報告	54
大島 邦子	
同窓会だより	56
野内 昭宏・古室 浩明・石崎 絵理	
教職員異動	60
歯学部各種委員会	63
編集後記	64





入学を祝して

新潟大学歯学部長 井上 誠

新潟大学歯学部歯学科、口腔生命福祉学科に入学の皆さん、保護者ならびにご家族の皆様、ご入学、誠におめでとうございます。

2020年から世界中に広がった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のために皆さんの生活は大きく変わり、困難な環境の中で高校生活を送り、勉強をされて来たことと思います。世界を巻き込んだパンデミックの時を経て、2023年5月8日には感染症法上の位置づけが5類感染症に移行しました。これからは「個人の選択を尊重し、国民の自主的な取組をベースとした」対応が要求されるということです。人々はウィズコロナという、新たな日常とともに新たな価値観を見出し始めているともいえます。世界がCOVID-19からの出口を見出したことにも重なり、今回入学を果たした皆さんは、自らの大学生活と未来に改めて大いなる期待と希望をもって胸を膨らませていることと思います。

このたび入学した皆さんは、新潟大学歯学部の特色をどのようにイメージしていましたか。

オープンキャンパスやインターネットによる情報などを通して、「早期臨床実習」、「診療参加型臨床実習」、「短期留学制度」などを印象としていたことでしょうか。いずれも新潟大学歯学部が誇る学部教育の特色ではあるのですが、入学前にその内容について詳しく述べる人がいません。経験していないのですから。実際に、入学後の皆さんに聞いてみても、「入学案内で知っただけです」という声が聴かれました。こうしたやり取りを通して、昨年から話題となっている生成型AIのChatGPTのことが頭をよぎりました。

ChatGPTでは「大規模言語モデル」が基盤となっており、インターネット上に存在する大量のテキストから、もっともらしい文章を学習して書き出してくれます。しかし、この大規模言語モデルは、条件反射的な動作をしているに過ぎません。与えられた情報を自らが解釈した上で、自らの考えをもって主観的に出力するといったことはしないのです。「早期臨床実習」、「診療参加型臨床実習」、「短期留学制度」の何が素晴らしいのか、なぜそのオリジナリティを新潟大学が大切にしているのかをこれから体験してください。実際、私がChatGPTで新潟大学歯学部の特色を聞いたところ、「国際的な教育環境の中で留学生プログラムや国際交流プログラムを積極的に推進している」、「歯学研究の分野で優れた評判を持っており、最新の研究と技術を導入することで、学生は最新の知識と技術を学び、歯科医療の分野でリーダーシップを発揮する準備が出来る」、「臨床実習や病院での実務経験を重視しており、学生は実際の患者との接触を通じて臨床スキルを磨き、実践的な経験を積むことができる」、「地域社会に積極的に貢献し、地域の歯科医療ニーズに対応するプログラムやサービスを提供している」、「連携病院と協力して臨床実習を行っており、学生に実践的な経験を提供するとともに最新の診療設備や技術を活用できる」との回答を得ました。しかし最後に、「ただし、具体的な情報は変更される可能性があるため、最新情報を確認することをお勧めします」ともありました。情報があふれている今日の社会にこそ、自らの経験や周囲との関わりの中で見出した価値観を定めることが大切であり、このことはウィズコロナにおける「個人の選択と国民の自主的な取組」に通じるものがあると思って

います。

新潟大学歯学部は、「包括的医療を行うことのできる有能かつ感性豊かな歯科医師の育成、歯科医学発展のために指導的な人材および保健・医療・福祉に貢献する専門職業人の育成」であり、「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としています。その中核をなすのが、Problem-based learning (PBL) という学習方法です。PBLでは教員は学習者の補助者にすぎず、「学習の主体は学生である」という概念で学習が進んでいきます。また、歯科医療・口腔保健医療教育の集大成である臨床実習は、新潟大学医歯学総合病院を学びの場として臨床実習を展開しています。ことに歯学科では、「診療参加型臨床実習」を展開しており、インストラクタの指導の下で、学生自らが検査、診断、治療を行う機会をもちます。繰り返し強調しておきたいのは、新潟大学歯学部の教育の主役は学生本人であるとい

うことです。

2023年の干支（えと）をご存じですか。兎年、と答えたあなた、それは正確には十二支のことです。干支という言葉は、古代中国より始まった十干（じっかん）と十二支を組み合わせた暦の数え方であり、2023年は「癸卯（みずのとう）」にあたります。癸（みずのと）は、十干の最後（10番目）にあたり、大地を潤す恵みの水を表す言葉で物事の「終わり始まり」という意味をもちます。そして卯とはウサギのこと。癸卯である2023年は、COVID-19が収束に向かい、ウィズコロナ、ポストコロナに向かって、社会が、そして私たちが、兎が駆けるが如く飛躍する年となる、ということを示唆しているように感じます。皆さんの学生生活が充実し、4年後、6年後には笑って卒業式を迎えられるよう、学生自身が努力と精進をもとに飛躍し続けてほしいと願っています。





入学を祝して

医歯学総合病院副院長（歯科総括） 多部田 康 一

新潟大学歯学部歯学科・口腔生命福祉学科の新入生の皆さんへ

新潟大学歯学部へのご入学、心からお祝い申し上げます。皆さんは新型コロナウイルス感染症の影響による制約や困難を乗り越え、ここ新潟大学歯学部に入り着きました。その決意と忍耐力に敬意を表し、皆さんを歓迎いたします。

皆さんはこれから歯学部において、歯科医学、口腔保健医療・福祉について学び、そして将来、専門職業人として、またはその指導者や教育研究者などとして社会に貢献することが期待されています。そのためには、卒業と同時にライセンスを持つプロフェッショナルに成長するまでに、決められた年限内での知識、技術、態度における膨大な学びが必要です。新潟大学歯学部においては皆さんが効果的に学習できるようにカリキュラムが組まれており、年度ごとの単位を取得することでプロフェッショナルとなる準備を整えていきます。焦る必要はありません。しかし、卒業まで着実に学び続けることが必要です。自己管理と時間管理によって学習や課題の計画を立て、時間を効果的に使い、自分自身の生活を管理することが何よりも大切です。

皆さんがこれから学ぶ歯科医学は、専門的な知識と技術を身につけるだけでなく、人として、将

来の医療従事者としての成長も追求するものです。高度な診療技術と最新の医学知識は不可欠ですが、それだけでは足りません。質の高い医療を提供するためには、人としての豊かさ、思いやり、そしてコミュニケーション能力が欠かせません。そしてこれからの時代には、医療技術に加えて、社会や個々の患者さんとの関わりを通じて得られる情報を整理し、適切な決定を下す能力が求められます。それには、広い視野を持つこと、チームとして働く能力、そして何よりも他人の感情や視点を理解する共感力が必要です。皆さんが新潟大学歯学部で過ごす時間は、専門的な知識とスキルを得るのみでなく、自身の人間性を深めるための大切な時期でもあります。クラブ活動やボランティア活動、日常生活の中での人々との関わりを通じて、楽しみながら社会への理解を深めていく時間を大切にしてください。

新潟大学医歯学総合病院の理念は「生命と個人の尊厳を重んじ、質の高い医療を提供するとともに、人間性豊かな医療人を育成する」です。本院において成長した皆さんと一緒に患者さんを診て、研修を行う日を心待ちにしています。皆さんの経験すべてが学びです。大学での学習を重んじながらも、色々なことにチャレンジし、楽しみながら充実した学生生活を送ってください。

入学者のことば

入学者のことば

歯学科1年 小川果澄

秋田から新潟に引っ越して数日後の初めて歯学部1年生が顔を合わせる日に、私はこれから6年もの間を一緒に過ごしていく仲間がどんな人たちなのかという期待と同時に、新潟に知り合いが誰もいない不安とでいっぱいでした。しかし、約3か月が過ぎた今、新潟での私の大学生活は想像していたよりも何倍も楽しく、充実しています。

今年はコロナが落ち着いて初めての春ということで、ほとんどの授業が対面授業になったり、早期臨床実習での病院見学が再開したりしています。大学の授業でいつもいちばん楽しみにしているのは早期臨床実習です。歯学の知識が全くない私にとっては見るもの聞くもの全てが新鮮で、たくさん刺激を得ています。中でも特に印象に残っているのは患者役実習です。1年生は6年生の先輩方から治療体験を受けさせていただきました。1年生にたくさん話しかけたり、教えてくれたりしながら治療をしている6年生の姿は本当にかっこよくて、憧れを感じました。私が5年後に今の6年生のようにになっている姿は全く想像できませんが、6年生の先輩たちに少しでも近付けるように、これからたくさんのことを学んで努力していきたいと思っています。

次は部活についてです。私は小学校と中学校でバスケット部に所属していましたが、高校ではバスケットから離れていたため、なんだか物足りなさを感じていました。そのため、大学では絶対にバスケット部に入りたいと決めていました。今は週2回全力でバスケットができるのがとても楽しいです。しかし、バスケットをすることができる以上にバスケット部に入っただけでよかったと思うことがあります。それは、たくさん先輩方との出会いです。バスケットのことや大学生活のことなど多くのことを教えてください、

とても頼りになる方々ばかりです。私たち1年生は先輩方がいつも楽しませてくれることがとても嬉しいです。今は、8月に茨城県で開催されるオールデンタルに先輩方と一緒に出場できることがとても楽しみです。

最後に同期についてです。1年生のうち全員で顔を合わせる機会が週に1回しかないためまだ話をしたことがない人もいますが、今年久しぶりに開催された歯学部運動会を通して確実に距離は近くなりました。同期のみんなとは、この先楽しいことも大変なこともある大学生活を一緒に過ごしていくことになります。お互いに助け合いながら、みんなで頑張りたいと思います。このメンバーで過ごすこれからの6年間は楽しみです。

まだまだ未熟ですが、楽ではない楽しさを追求し、何にでも全力で取り組んで過ごし、将来立派な歯科医師になれるよう頑張ります。

入学者の言葉

歯学科1年 三友湧斗



時の流れは早いものですね。気が付けば入学から3か月、そして入試からは4か月も経ってしまいました。2次試験の面接で何も話せず、帰りの新潟駅の新幹線ホームで泣きそうになっていた自分がここにいるのが今でも時々不思議な気持ちになりますね。そんな僕が今回「歯学部ニュース」執筆の機会をいただけたので、大した話ではありませんがお読みいただければ幸いです。

申し遅れましたが、三友湧斗と申します。出身は埼玉の川越、蔵造りの街並みや時の鐘といった観光地があるので、是非一度来てみてください

ね。部活は医歯学部ワンダーフォーゲル部、歯学部スキー部、クイズ研究部に所属しています。登山とクイズは高校からやっていました。

そんな僕ですが、音楽鑑賞が好きで特にB'zのファンクラブに入っているのです。ここでB'zの曲を一曲紹介したいと思います。今回紹介するのは『Pleasure～人生の快樂～』です。この曲は年によって歌詞が変わるライブの定番曲で、ファンの間でも人気の曲になっています。あくまで僕なりの解釈になります。著作権の関係上歌詞が掲載できないので興味がある方は調べてみてください。

主人公と“あいつ”は学生時代の音楽仲間。共に夢を追い、他愛もない話で盛り上げられる仲間だったが、“あいつ”は大手に就職し、家族を持ち、2人は疎遠になっていく。そんな一見“普通の生活”を選んだ“あいつ”も波乱万丈な人生を歩んでいくことになる。夢だけを追い続ける主人公と、夢を捨てて“人間らしい生活”を選んだ“あいつ”。果たして“この街に丸め込まれた”、すなわち社会の波に飲み込まれたのはどちらなのか。

ここまでが1、2番の内容です。ではラスサビを見ていきましょう。たとえあの頃が輝いていたとしても、もう過去には戻れない。今の自分自身がどのような状況にいてもそれは過去の自分が選択した道。だからこそ精一杯に胸を張って自分の道を進んでいくしかない。そういう稲葉浩志さんの強いメッセージが感じられます。

幼いころから歯科医師になりたかった人もいれば、人によって希望する進路ではなかった人もいられるかもしれません。僕自身ここには自ら希望して来ましたが、18歳の少年が一生歯科医師として生きていくという決断を下したことに不安の気持ちもあります。それでも自分で選んだ人生、突き進んでいきたいと思っています。まだまだ大学生活始まったばかりですが、6年間の大学生活、そして長い人生で沢山の“Pleasure”を手にしたいためなのです。

入学者の言葉

口腔生命福祉学科1年 小笠原 舞

入学して3か月が経過し、ようやく大学生であることに慣れてきました。この3か月は一日一日が人生で一番濃かったように感じました。大学生生活に憧れがあったので実際に生活をしてみて、苦労することもあります。充実した日々を過ごすことができている。

大学生となり、高校生の時と比べて一番変わったことは時間の使い方です。高校生の時は時間割が決められており、自由に使える時間が限られていましたが、今は自分で考えて行動することができます。一人暮らしを始めて初めのうちは、契約しなければならぬものや、用意しなければならないものが沢山ありました。それを終わらせるのには空きコマの時間がとても役に立ったので、やることが多い分自由な時間も多いのだと感じました。前期は免許を取るという目標があったのですが、空きコマや授業終わりの時間を活用してもう少しで卒業検定というところまで来ました。目標達成に向けてあと少し頑張りたいと思います。後期はもう少し時間が増えるので、バイトなどのやったことがない事に挑戦していきたいと思っています。

また、私は部活やサークルに入ったのですが、入ってよかったと心から感じています。部活は歯学部の硬式テニス部、サークルは全学のモアチャットという硬式テニスのサークルに入りました。中高とテニスをしていたので、またテニスがしたくなりどちらも硬式テニスを選んでしまいました。どちらでも楽しくテニスをしているのですが、特に部活が楽しく、毎週の楽しみになっています。私がこんなに部活を楽しめているのは、部活の先輩方がみんないい人ばかりだからです。部活動紹介の時に部長の方が声をかけてくださったことがきっかけで入りました。大学に入ったばかりで心細かったのですが、部活の体験で先輩方が温かく迎えてくれて心強く感じたのを覚えています。部活中は4、5年生の先輩や時々来てくださる先生がアドバイスをしてくれて、少しずつでは

ありますが上達しているように感じています。どんな些細な質問にも真剣に答えてくださるので、教えてもらった側もアドバイスを生かしたいと思い、上手くいっているのだと思います。部活の先輩方には感謝しながら、先輩方に近づけるように見習っていきたいと思います。

私が部活で素敵な人たちと出会うことができたように、大学には新しい出会いが沢山あると思います。今出会えた人たちを大切にしながらも、これからもっと他の活動にも参加して色々な人と大学生活の中で関わっていきたいです。4年間はあっという間だと思いますが、毎日楽しみながら頑張っていきたいと思います。

入学者のことば

口腔生命福祉学科1年 大 関 彩 月

はじめまして、こんにちは。入学してから早くも3か月が経過し、もも太郎アイスが美味しい夏日も増えて参りました。皆様はいかがお過ごしでしょうか。簡単に自己紹介をさせていただきますと、今年度より口腔生命福祉学科に入学いたしました、大関彩月と申します。出身が栃木県なので一人暮らしをしています。引っ越し当初は「すごい、海がある！」と浮かれていた栃木県民ですが、坂や海風に阻まれ、非常に煩わしいスーパーへの買い出しを強いられ苦しむ今日この頃です。

1タームを振り返ると、慣れない一人暮らしやパソコンの操作に一喜一憂し、新大の広大な敷地に体力を奪われ、綺麗な図書館に圧倒される等々でとても新鮮な毎日でした。ゴールデンウィークには約1か月ぶりに地元へ帰り、「おふくろの味」に感動し、新潟に戻ってまんまとホームシックに陥りましたが、何とか乗り切ることができました。また、高校時代に失われた体力を復活させようと運動部に所属しようと思い、歯学部と医学部が合同で活動する陸上部に入部しました。全くの未経験で入部したこともあり、練習は真似をしようにも思うようにいかず、大変です。しかし、自分と同じような未経験の同期と励まし合い、先輩方にもたくさん支えられながら活動しています。

さて、新大で過ごしていく中で私が最も幸せに思うことは、たくさんの良き人々に出会うことができ、楽しい日々を送れているということです。歯学部のオリエンテーションや運動会、早期臨床実習、部活を通し、学部学科や学年の垣根を超え、たくさんの友達や頼れる先輩と知り合うことができました。歯学について同じ志を持ち、協力し合える同期と出会うことができたことは私にとって今後4年間の大きな支えとなり、人生の財産となることでしょう。勉学のみならず、日常生活の些細な悩みを打ち明けたり、くだらない冗談を言い合っただけたりできる毎日が本当に幸せです。

もちろん楽しいだけでなく、初めての経験から、うまくいかずに戸惑って失敗して悩んで…ということが多々あると思います。そんな時、失敗しないことを目的に、慎重に周りを見て行動することも大切です。しかし、慎重になりつつも新たに挑戦するアグレッシブな精神は、自分自身をさらに成長させてくれる大きな力であると思います。大学生のうちにしかできない失敗や経験は必ずあります。同時に、その経験から学べることはとても大切なものであると確信しています。私はそんな4年間を挑戦とチャンスと捉え、一瞬たりとも無駄にしないよう、邁進してまいります。

最後になりますが、これまで私たちを支えてくださった全てのご家族に感謝申し上げます。2023年度入学の同期の皆さん、最後まで一緒によろしくお祈りします。歯学部の先生方、入学して3か月、既に熱心なご指導をありがとうございます。先生方の熱い気持ちに触発され、非常に良い刺激をいただいております。ご迷惑をおかけすることも多く恐縮ですが、今後もよろしくお祈りいたします。

入学者のことば

顎顔面口腔外科学分野大学院1年 金 井 爽 海

今年度、新潟大学大学院医歯学総合研究科 顎顔面口腔外科学分野に入学しました、金井爽海と

申します。今回、初めて歯学部ニュース執筆の機会を頂戴しましたので簡単な自己紹介をさせていただきます。

生まれも育ちも新潟県で、大学入学まで新潟市で過ごしました。大学は九州の玄関口、福岡県北九州市にある、九州歯科大学出身です。北九州市は新潟市と同程度の都市ですが、昭和の雰囲気を残した街でさまざまな新旧の文化が入り混じったところでした。初めこそ、新潟が恋しく寂しさが入り混じった日もありましたが、一人暮らしは悠々気ままに、のびのびと6年間を過ごしました。心残りがあるとすれば、飲めたら楽しいだろうなというお店はたくさんありましたが、お酒がほぼ飲めない体質なので素敵なお店を開拓せずに帰ってきたことです。高いお店も行けずじまいでしたので、美味しいお店を紹介してほしいという質問にはいい返答ができそうにありません。

入学した時点で九州で暮らそうとは思っていませんでしたが、6年経ってもその気持ちは同じでした。新潟以外での研修も考えましたが、土地勘のない場所で働き始めて、精神的にきつくなると辛いと思い、新潟大学病院Bコース 前半：顎顔面口腔外科 後半：新潟労災病院を選びました。マッチング出願中は、就職後や10年後の自分の姿を想像する余裕がなかったので、診療科を決めかねていました。臨床実習で回っていたのが口腔外科だったこと、友人に勧められたことから第一志望にし、HPを見て、当時、興味があった口唇口蓋裂(cleft)に力を入れている、顎外を書きました。

研修医として働き始め、病棟、外来の仕事のひとつと通り覚えられるようになった夏頃、顎外でもっと技術を学びたいと思い、入局を決めました。有難いお話があり、研修医修了後に関連病院で一般歯科を中心に1年間学ばせていただき、現在に至ります。大学院生として3か月が過ぎましたが、病棟でも外来でもできないことだらけで日々、先生方からお叱りの言葉を受けています。目下の課題は、自分が自信を持ってできる処置を一つひとつ増やすことです。また、埋伏智歯抜歯を焦らず、丁寧に正しく行うことなど、口腔外科の基本を習得最中です。現段階では口唇口蓋裂や顎変形

症のようなmajor surgeryを自分が執刀する日が来るかどうかは見当もつきません。まずは口腔外科が嫌になるまで、やりたくないと思うまでは努力を続けたいと思っています。

最後になりますが、無知、無力な自分に対し、温かく指導してくださる環境が整っていることに感謝申し上げます。上級医の先生方にはご迷惑をかける毎日ですが、少しでも期待に応えられるように邁進して参りますので、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

入学者のことば

う蝕学分野大学院1年 高橋 竜平



新潟大学大学院医歯学総合研究科 う蝕学分野 博士課程1年の高橋と申します。この度、歯学部ニュース「入学を祝して-入学者のことば」執筆の機会をいただき、僭越ながら寄稿させていただきます。

させていただきます。

私は、新潟大学歯学部歯学科を卒業した後、新潟大学歯科医師研修プログラムBにて、前半を新潟大学医歯学総合病院の歯の診療科、後半を魚沼基幹病院の歯科口腔外科にて研修を修了し、大学院新潟大学医歯学総合研究科のう蝕学分野へ入学しました。歯科医師研修では、先生方にご指導をいただきながら、修復治療・根管治療、抜歯、インプラント補綴、顎切、周術期管理、全身麻酔など数多くの診断・治療を学ばせていただきました。また、治療方法だけでなく歯科医師として患者さんとの向き合い方、コメディカルとの連携、地域のコミュニティとの付き合い方など研修を通して、医療人としての在り方を学べたと実感しています。歯の診療科、魚沼基幹病院での研修を通して、指導医の先生、医局の先生、衛生士、看護師、MR、薬剤師、病理医のみなさんには大変お世話になりました。研修で学んだことは、これからの長い歯科医師人生の様々な場面で生きてくると思います。この場を借りて、感謝を申し上げます。

ます。

研修・進学先は、学部時代に「分からなかったこと」を自分の中で飲み込んだ上で実際に診療を行いたいという思いから選択しました。例として、歯の保存の可否判断や治療法・歯科材料の選択などが挙げられます。また、世間では歯科治療において、歯をすぐ抜く歯医者はやめた方がいいという考えが見受けられるように思います。これは、治療の説明不足や治療方針の差異によるものと思われませんが、このような日々の診療の疑問や患者さんの不安に対して、エビデンスに基づいて説明でき、治療方針を立てられるようになりたいと考えていました。歯の診療科では、修復治療や根管治療など、歯の保存の可否に関わる疾患の診断・治療を行っており、魚沼基幹病院では抜歯・再植からインプラント補綴まで学べたため、これらの疑問に対応することが少しずつできるようになったと思います。

研修中に一番難しいと感じたのが、歯を残せるかどうかの判断です。基本的な診断はもちろんですが、選択できる治療法の予知性や自分の技術、年齢や疾患などのバックグラウンドなど様々なことを考慮に入れて、患者さんと検討していく必要があります。ベストではなくても、より良い選択ができるようになりたい。基礎的、臨床的にエビデンスに基づいた治療を行いたいという思いから、私は大学院のう蝕学分野へ進学することを決めました。

現在は大学院にて、バイオフィルムの研究を行っています。細菌と細胞の両面からアプローチするため勉強することがたくさんあります。大学院生活は、始まったばかりで、難しいことや大変なこともあります。指導医をはじめ教室の先生方に助けられながら、日々楽しく充実した生活を送っています。これからも、研究活動、診療において自分の目標とする歯科医師像に近づけるよう、日々努力したいと思います。

入学者のことば

口腔生命福祉学専攻博士前期課程 1年

佐々木 史 佳

私は16期の編入生として口腔生命福祉学科に入学、2年間の学生生活を経て卒業し、就職と同時に大学院に進学しました。最初は就職活動だけをしていましたが、必ずと言って良いほど編入の動機や歯科と福祉を両方学ぶ意義を問われることがあり、自分がしてきたことが認められるのか不安が生まれました。コロナ禍の入学で想定してはいたものの、福祉を勉強しに入学したのに福祉実習ができず、「福祉の現場」のイメージができないまま卒業して形だけの資格を取ることに疑問を覚えました。口腔生命福祉学科の永遠の課題のように思えますが、ダブルライセンスをどのように活かすか。元々、歯科に加えて福祉の視点も持ち、人々の生活に密着した支援ができるようになりたいというのが私の中でありました。福祉サービスを利用する方と関わる仕事を通して、口腔保健に関する情報や重要性を、普段歯科を受診しない方にも伝えたい。そして、少子高齢社会における歯科と福祉の繋がりについて自分の力で形に残したいと思い、進学を決めました。

今年の新入生のほとんどが社会人生活との両立なので、大学院の授業は先生と課題をメールでやり取りしたり、日程調整をして月に数回対面授業を行ったりしています。研究の方では、先生とテーマや調査方法の打ち合わせを行っている段階です。倫理審査など研究を進めるために必要な準備や手続きがあることが分かり、世の中で行われている研究の流れや各所への配慮を知ることができました。私はこのような学生生活を送りながら、デイサービスで介護職員兼生活相談員として勤務しています。業務内容にはありませんが、利用者さんの歯磨きの様子を見て道具の使い方を教えたり、自分から進んで歯磨きをしない方に声をかけて歯磨きを促したりしています。歯科衛生士として働いたことはないにしても、利用者さんのお口の状態で気になるとことがあれば他職種から意見を求められたこともありました。その時に、

課題で歯科関係の論文に触れたり、自分で調べたりすることで、知識の再確認やアップデートができ仕事にも役に立つと実感しました。口腔保健に詳しいということを自分の強みにして、利用者さんが満足できるサービスの提供や新規顧客の獲得に繋げていけたらと考えています。

最近、会社がデイサービスで口腔機能向上加算を算定する取り組みを始めようとしています。健康寿命延伸のため介護を通して口腔保健の大切さをより多くの方に伝えたい、という目標に一步步近づき始めているため、仕事で期待されるダブルライセンスの役割を果たすためにもどちらの勉強も続けなければと思っています。今後は口腔健康状態とADLについて研究しようと計画を立てており、良い結果が出ることを期待してデータ収集や分析を行っていく予定です。論文投稿にも興味があるので、形に残し将来誰かの役に立つことを願って研究に向き合おうと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

入学者のことば

口腔生命福祉学専攻博士後期課程1年

山口萌絵

今年度より、口腔生命福祉学専攻博士後期課程に入学しました山口萌絵と申します。口腔生命福祉学科を8期生として卒業しました。卒業後数年経ちますが、こうしてまた新潟大学でご指導いただけることを大変嬉しく思います。卒業後の経歴は、地元の歯学部附属病院にて2年間勤務した後、専門的にがん治療に携わりたいという希望があり、静岡がんセンターにて勤務致しました。静岡がんセンターのことを初めて知ったのは、学部生時代に静岡で勤務する歯科衛生士の方の講演を聞く機会があったことがきっかけでした。終末期まで患者さんに寄り添える歯科衛生士の姿がとても印象深く残っており、一度は地元に戻りましたが、御縁があり静岡がんセンターにて勤務する

ことが出来ました。静岡がんセンターでは、周術期口腔管理や口腔支持療法を取り入れたことで有名で、ここでもがん治療の流れや周術期口腔管理を学ぶことが出来たことは非常に良い経験となりました。就職後も口腔生命福祉学科の卒業生や先生方とのつながりがあり、現在は愛知県の藤田医科大学病院にて急性期病院の歯科で周術期口腔管理や入院患者の口腔ケアなどを行っております。藤田医科大学病院では、これまでに携わったがん患者だけではなく、心疾患や脳血管障害などをはじめ多様な疾患を抱える患者さんとの関わりを経験いたしました。さらに、摂食嚥下リハビリテーションに歯科も連携しており、間接訓練の介入や嚥下回診の同行など、多職種連携しながら摂食嚥下リハビリテーションも積極的に携わっています。昨年度より、愛知県岡崎市にあります関連病院の岡崎医療センターへ異動となり、また新たな環境となりました。岡崎医療センターの歯科は非常勤歯科医師1名、歯科衛生士2名という体制で、歯科ユニットも1台という、これまでに経験したことのない環境ですが、少ない人数だからこそ、連絡を密に情報を共有しやすく、また多職種との距離も近く連携しやすい環境だと感じております。小規模ではありますが、歯科として貢献できるような日々診療業務を行っております。

大学院進学の間についてですが、以前より進学に興味を持っておりましたが、なかなか実現できずにおりました。学会発表や臨床研究に携わる中で、日常臨床の疑問をテーマに研究計画を立て、自身で研究を進めてみたいという気持ちに至りました。それを実現するために、研究計画や医療統計、データの解析方法などについてさらに知識を深め、臨床研究の精度やスキルを高めたいと思い入学を決意いたしました。まだ入学してから間もなく、これから卒業まで困難が待ち受けていると思いますが、先生方にご指導いただきながら、実りの多い大学院生活にしたいと考えております。皆様どうぞよろしくお願ひいたします。

歯学部ルネサンス

歯学部生の今

歯学科2年 松澤 耕太郎

この春に2年生に進級してから早くも3か月が経とうとしています。2年生に進級してからは生活が大きく変わり、多くの方が学習や部活動など忙しい毎日を過ごしています。季節は春から夏へと移り変わり、新しい環境にもようやく慣れてきたように感じます。今回は進級してからの3か月間の中で私が感じたことをご紹介しますと思います。

2年生に進級して、専門科目の学習が本格的に始まりました。専門科目の授業は昨年までの教養科目の授業とは異なり、内容が深く1回あたりの授業で学習することも非常に多くなったように感じます。昨年までとは比べ物にならないほど覚えるべき事項が多く、授業の難易度も高いため、日々の授業に何とかついていけるよう、予習や復習を欠かさず行うようにしています。日々の学習に追われる毎日ではありますが、それでも専門科目で学んでいる内容は将来歯科医師になるために必要な知識でもあるため、モチベーションを保って意欲的に学習に取り組んでいる人が多いように感じます。

新型コロナウイルスに対する規制も徐々に緩和されつつあり、ほとんどの授業が対面授業となりました。オンライン授業が主体だった昨年までとは違い、集団で授業を受けることが多くなったため、周りの人と接する機会も増えました。休憩時

間にも勉強をしたりお互いに分からないところを教え合ったりする姿が見受けられ、意欲的に学習に臨んでいる人が多いように感じます。そんな周りの姿に私自身も日々刺激を受けながら生活しています。

また、私は江戸千家茶道部に所属しており、6月には燕喜館で開催された開学記念茶会に参加しました。このお茶会で私自身は初めてお点前を披露させていただきました。練習時間が限られていたため、大勢の方の前でお点前をすることに強い不安感がありましたが、滞りなく終わることができ、練習の成果を出せたのではないかと思います。当日はお点前を披露するだけでなく、他の流派のお茶席にも入ることができました。一口に茶道といっても、流派ごとに作法が異なるため、他流派のお点前を拝見するたびに、長い歴史の中で培われてきた茶道という文化の奥深さを感じます。歴史ある建物の中で季節を感じながらお茶を楽しむことができたことも非常に貴重な体験となりました。これからの部活でもさらにより良いお点前ができるよう練習に励みたいと思います。

夏季休業が明けると前期の定期試験が始まります。これまでもいくつかの試験を受けてきましたが、夏季休業明けは短期間に試験が集中するため、これまで以上に忙しくなることが予想されます。困難な日々が続きますが、「よい歯科医師になること」を目標に周囲の人と互いに助け合いながら、学年全員で乗り越えていきたいと思いません。

歯学部生の今

歯学科2年 脇本 和

歯学科2年生が始まり、私たちは大きく2つの変化を迎えました。1つは専門科目の授業の開始、もう1つは新型コロナウイルス対策の緩和です。私は、最初は専門科目の勉強についていけるかという不安や、去年はほとんどリモートによる授業だったためクラスメイトと仲良くなれるかといった緊張も感じていました。しかし実際は、忙しいとは言いながらも充実した日々を送っています。

まずは、専門科目についてです。1年生と比べ勉強が大変なのはもちろんですが、いよいよ将来に直接つながる勉強が始まったという喜びは大きいです。自分の興味がある分野を深く学ぶと、受験勉強や教養科目の勉強よりも疑問点や異なる視点からの考えが次々と浮かんできて楽しいです。一方、先生方の講義を聞く中で、実際の診察や手術の様子がより具体的に想像できるようになり、歯科医師という職業の責任の重さをひしひしと感じています。思いやりのある人でも、器具の適切な処理方法が分からなければ、患者さんの命を奪ってしまう可能性があります。自分は、知識の欠落によって簡単に人の命を奪ってしまい得る業界に足を踏み入れたのだと改めて実感しました。「進級するために勉強するのではなく、良い歯科医師になるために勉強しよう」とおっしゃった先生がいましたが、本当にその通りだと感じます。

「今学んでいる知識の定着が将来提供できる歯科医療の質を決める」という意識は、学習のモチベーションになっています。この意識は2年生以降も忘れずに持ち続けていきたいです。

次は、新型コロナウイルス対策緩和についてです。何よりも、友人と一緒に時間を過ごせることが嬉しいです。勉強で分からないところを教えてもらったり、部活の話をしたり、一緒にお昼ご飯を食べたり、大笑いしたりするだけでとても元気が出ます。また、今年は数年ぶりに歯学部運動会が開催されました。どの競技も歯学部2年生一丸となって戦い、総合2位を獲得できました。先頭に立って作戦を立ててくれる人や、それについていく人、そして応援する人がいて、クラスメイトの素敵な一面をたくさん知ることができました。それは運動会に限られたことではありません。部活やアルバイトをしながらも勉強に励む友人の姿を見て、自分も頑張ろうと毎日刺激を受けています。

こうして少しずつ日常が戻ってきたようにも思えますが、まだ新型コロナウイルスが終息したわけではありません。旭町キャンパスは病院と併設されていることもあり、自分の行動が周囲に及ぼす影響をよく考える必要があります。迂闊な行動で今の生活が壊れないよう留意しつつ、新型コロナウイルスに負けずに、「これができなかった」ではなく「こんなことができた」という種類の思い出をたくさん作っていききたいです。

歯学部生の今

歯学科3年 西川 眞生

6月27日、解剖学実習第3回目の口頭試問が無事終わり、この原稿に向き合っています。3年生に進級して数ヶ月、2年生に比べて実習の割合が増え忙しさはありますが、少しずつ専門的な知識を身につけることができる環境に喜びを感じる毎日です。今回は前期のカリキュラムの中で特に印象に残っている解剖学実習について書こうと思います。

解剖学実習は5、6人で1グループとなり、ご献体を解剖させていただきながら全身の構造や身体の仕組み、筋肉、動脈や神経の走行など座学では決して理解することができない領域までをも学ぶことができる貴重な授業です。また、身体は個人の生きてきた軌跡が鮮明に刻まれているため、解剖を進めていくとその方の生活習慣や生前のADLが予測できたりとどのような人生を歩まれてきたのかを考え、改めて「生命の尊さ」を直接肌で感じることもできる時間となっています。そのため、授業中の解剖で学ぶ知識は膨大で予習や復習が非常に大変ではありますが、このような機会は一生に一度であることを常に念頭に置いて残

りも気を引き締めて精進していきたいです。

また、この解剖学実習を行うにあたり指導してくださる先生方、新潟白菊会の方々やご遺族の方々、勉学を共にしてくれる友人達、歯学部での勉強を応援してくれている両親には感謝してもしきれません。私の班はペルーから来日している助教のAngela先生が担当して下さっていますが、丁寧に分かりやすく指導して下さり毎回の実習で先生から学ぶことができ本当に嬉しいです。さらに日本語、英語、ラテン語が織り混ざった会話のため、同時に他言語の学習もできて英語を勉強中の自分はさらに学習密度の濃い時間になっています。しかし、学びはやはり1人では行うことができません。同じ班や同期の皆と協力しながら学習を進め、時には身体の構造について議論し合い同定に至ったり、口頭試問の準備をしたりと切磋琢磨しています。友人達が一緒に真剣に取り組んでいるからこそ、自身も頑張ろうという姿勢を保っているのだと思います。そして、東京の実家から応援してサポートしてくれている両親にはこの場を借りて、お礼を伝えたいです。これからもこの環境を当たり前と思わず、感謝の気持ちを忘れずにこの実習で得た学びをこれから先の人生に活かしていきます。



解剖実習班、インストラクターのAngela先生と（著者は左から3番目）

歯学部生の今

歯学科3年 平山純成

こんにちは、歯学科3年の平山純成です。今回のテーマは「歯学部生の今」ということで私の学校生活について紹介していきたいと思います。歯学科3年で行っている活動といえば人体解剖学実習です。人体解剖学実習では実際にご検体を解剖していく中で各作業はもちろん、口頭試問やスケッチを通して人体の構造や仕組みを理解していきます。解剖学実習が始まった当初はご献体に対して不安感がありましたが、実習回数を重ねるごとにその不安感も薄れていき、スムーズに解剖学実習を進めることができました。ちなみに口頭試問とは先生と対話をしていく中で知識の理解度や定着度を評価していくものです。先生がおっしゃっていたように口頭試問は先生との真剣勝負であり、時にはうまく行かないこともありましたが、口頭試問を通して解剖学を継続的に丹念に学ぶことができました。

また、今年は歯学部運動会が行われました。歯学部運動会は4年ぶりということで前日準備や当日の運営を含めて分からないことだらけで大変でしたが、運動会を経験している5年生の皆さんに

助けてもらいながら運動会を楽しむことができました。5年生の皆さんありがとうございました。運動会の競技について私は障害物・借り物競争、大縄、綱引きに出場しました。綱引きでは6年生と先生の混合チームと対戦しましたが、強すぎる6年生と先生になす術なく負けてしまいました。来年以降は勝てるように日常的に運動していこうと思いました。しかし、3年としては15人16脚で2位になることができ、リレーではアンカーで逆転したりなどとても盛り上がったと同時に3年全体の仲が深まったと私は感じました。

次に部活動について話したいと思います。私は軟式野球部に所属しています。私は大学で8年ぶりに野球をしましたが、最初は大学の野球についていけず守備もバッティングも未熟でした。しかし、先輩方が一から指導してくれたおかげで少しずつ上達することができました。先日、春季リーグ戦が行われました。春季リーグ戦はチームとしてベスト4という成績でしたが、個人としては打撃成績があまり良くなかったので次の秋季リーグ戦までに少しでも改善していきたいと思います。

最後に歯学部生活はととても大変ですが、同期である57期のみんなと一緒に歯科医師になれるように頑張っていきたいと思います。



歯学部運動会の様子（著者は前から3列目の右から4番目）

歯学部生の今

歯学科4年 渡邊 開

こんにちは。今回初めて執筆させていただきます。今まで友人が歯学部ニュースの執筆を任されているのを見て、いつか自分も書く時が来るのだろうかと考えていましたが、4年生という歯学部生活も折り返しを迎えたところでこの機会をいただきました。

私からは歯学部生の学生生活について、勉強、部活、日常生活の3つに分けてお話ししたいと思います。

まず、勉強について今まで基礎の科目がメインのカリキュラムでしたが、3・4年生になり実習が増えました。実際に手を動かして自分で考えながら作業を行うことで段違いに理解が速くなったように思います。私は、1年生から歯科助手のアルバイトをしているのですが、実習で治療を教わったことによって今先生が何の治療をどんな目的を持って行っているのかを理解できるようになってきました。そして、治療後に先生と話した時に、実際私が今大学で学んでいることが臨床の現場に繋がっているのだなと強く実感することができ、歯学の勉強に好奇心を持って臨めるようになりました。歯科助手の業務は学生の時から臨床の現場を見るため、実習の意義を想像しやすくなります。歯学部生の皆さんにとって、私からお

勧めできるアルバイトのひとつです。

次に、部活動についてお話しします。私は、歯学部バドミントンに所属しているのですが、部活動は学生生活において学業とならば大きな自己成長の柱のひとつだと考えています。継続的な練習や努力を通じて養った目標達成の意欲は、私に多少の困難に立ち向かう精神力を与えてくれています。

現在私はコロナが明けた最初の幹部学年として部を率いる難しさを実感していますが、6月に他大学との交流で初めて県外に遠征を行った経験は率直にとっても楽しいものでした。夏にはデンタルが行われ、さらに全国の歯学部生と交流を深められることを心待ちにしています。

そして、最後に日常生活についてです。最近私は日常生活で歯学について考えさせられることが度々ありました。例えば、2歳の甥のお母さんから子どもの歯の生え方について尋ねられたことやTV通販の歯磨き粉の良さ悪しを家族から聞かれたことなどです。振り返ると我々の生活と歯学はよく関わりがあるように感じます。そして、実際私も事あるごとにどうなのだろうと疑問を持ち、考えるようになりました。これから進級していくと、臨床実習が始まります。患者さんの疑問も日常生活の中から生まれると思います。それに正しく答えられるように、日頃から歯学に関する事で疑問に思った事はすぐ調べるという習慣を身に付けていきたいです。

歯学部生の今

歯学科4年 新谷 愛

4年生ももうすぐ半分が過ぎようとしています。私は編入生なのですが、高校時代から歯のグッズを集めるほど歯が好きだったので、今こうして歯学の道を歩んでいることを思うと感慨深く、本当にありがたいことだと感じています。

4年生では、全部床義歯学実習や予防歯科学実習に取り組んでいます。全部床義歯学実習では、0.1mm単位で人工歯を並べたり、歯肉の形態を再現するのが難しいですが、一生懸命並べた歯を見ると達成感を感じ、愛着がわいてきます。また、予防歯科学実習では、いくつかのグループに分かれ、それぞれが口臭、歯科材料、歯磨剤、洗口剤などに関する実験を行って、最後に他班の前で発表を行います。私たちのグループでは市販の洗口剤を1か月間使い続け、その効果を比較します。条件を揃えるために、朝は歯磨きだけ、昼食後は洗口剤を使用、夕食後は洗口剤を使用してから1時間後に歯磨きをする、という生活を送っています。洗口後は1時間飲食できないのですが、そういう時に限ってどうしようもなく水が飲みたくなったり、偶然おいしそうなお店を見つけてしまったりして困ります。ですが、忍耐力が鍛えられ、規則正しい生活が送れるため、ありがたい実習です。私たちのグループの担当の先生はミャンマー出身で、日本語だけでなく英語を使いながら教えて下さるので、英語に触れ、使う機会が多く、とても充実しています。

講義では、皆でディスカッションをしながら1つのプロダクトを完成させる形式のものが増えて

きました。ディスカッションにおいては、これまでの基礎知識が体系づけられていることは前提として、自分の考えを言語化し他者に伝える能力、他者の考えを尊重し引き出す能力、様々な意見を調整する能力などが求められます。これらの能力は、多種多様の背景を持つ患者さんやその家族に寄り添い、多職種連携により質の高い歯科医療を提供するために不可欠なものだと感じています。簡単に身に付くものではないですが、先生方や先輩・同期・後輩に学びながら、徐々に育てていきたいです。

最後になりましたが、私は編入したこのクラスでたくさんの良い出会いに恵まれました。日々学びを共にしている同期は、一人一人に尊敬するところや見習いたいところがあって、多くのことを気付かせてもらったり教わったりしています。いつも仲良くしてもらっている編入同期は、それぞれ独自の切り口を持っていて、皆で話していると、物事を多角的に捉えることができ、新しいものが生み出されるような感覚を覚えます。それぞれにやりたいことがあって、様々な分野に進むと思いますが、「将来皆で何か新しいことができたらいね！」と夢を膨らませています。私自身はCODA (Children of Deaf Adult(s) : きこえない・きこえにくい親をもつきこえる子ども)、ヤングケアラー、障がい学生に関する研究のお手伝いをさせて頂いて、マイノリティが生きやすい環境・社会をつくっていくために、歯科の分野から何ができるだろうかと日々考えています。そのアイデアを形にできるよう、これからも様々なことを吸収しながら、じわじわとエネルギーを溜めていきたいです！

歯学部生の今

歯学科5年 金子裕太

1年生の頃、歯学部棟のなかで緑衣を着た先輩が別次元の人と感じていました。それが、今自分が着ているのを考えると月日の流れの早さを感じます。

5年生になって講義の数は減り、実習がより臨床に近いものとなっています。実習が増え、7月にはCBTが控えており、目まぐるしい日々を過ごしています。

5年生になって大きく変わったと感ずることがあります。それは、新しい知識を与えられて学ぶという学習から、自分の知識を用いて考え、補うべき知識や技能を自分から学習するようになったことです。実際、座学や今までの実習で学んだことを同級生に行なうポリクリや、様々な治療を必要としている口腔を再現した模型を用いて各々で計画を立て治療をするという総合模型実習が始まりました。ポリクリでは、4月の段階で浸潤麻酔や下顎孔伝達麻酔を行いました。初めて針を刺入する際の、緊張感と、手が汗ばんでいく感じはやはり印象に残る経験でした。

日々の実習を通して思うことは、座学で学んだことを元に実際に治療をする難しさと、そもそも今までの学習が本当に自分のものとなっていないということです。実習で実際に治療計画を立てる過程で、一口腔単位の治療をするのがどれ程大変なことなのかを感じるとともに、やりがいや面白さのようなものも感じています。

忙しく大変な日々を乗り越えられているのは同期の存在が大きいと感じます。私は、同期となって5年目になった個性ある10人の仲間がいます。

コロナの影響は明らかにありましたが、制約のある中でもこの同期のおかげで色彩豊かな時間を過ごせています。本当に感謝しかないです。また、“55期生として一緒に卒業できるよう頑張らないといけない”という動機が、多少なりとも日々の学習意欲につながっているのもやはり仲間の存在の大切さを感じます。

大学生活も残り2年を切ってしまいました。今後学生中にやる一つ一つの手技が、次に行うのが患者さんに対してということも多いと思います。日々の実習や学習に緊張感を持って取り組んでいきたいと思います。末筆となりましたが、この有意義な大学生活は家族や先生方の支えや御指導あってであるということ強く感じています。改めて、未熟者な私が歯科医師になれるよう日々ご教授くださる先生方、見守ってくれている家族、仲間に感謝しています。



大切な仲間と、運動会にて
(著者は最前列左から1番目)

歯学部生の今

歯学科5年 今井 真実子

学生生活も5年目に突入しました。先生方にご指導いただき、同期と切磋琢磨しながら日々学んでいます。

5年生のカリキュラムは、アウトプットが多い印象です。特に、PBLや全身管理学の授業を受けながら強く感じます。これらは班員と話し合い自分たちで問題点を見つけ解決策を立てるような授業です。いままでに学習してきた内容を統合させて考えることが重要ですが、課題を解決するために不足している知識がわかり非常に有意義な授業であると感じます。また、知識ももちろんですが、グループで一つのプロダクトを完成させるにあたりコミュニケーション能力の重要性も感じています。限られた時間の中で班員の考えを聞き、自分の考えを伝え、相違点をまとめながら一つのプロダクトに帰着させることは容易ではありません。

加えて、総合模型実習やポリクリが始まりました。総合模型実習では、複数の歯科疾患を同一模型上に再現したものをを用いて、一口腔単位の治療を想定した実習を行います。模型にはう蝕、歯周疾患、歯の欠損等が再現されており、これらに対して治療計画を立てるとともに、その治療計画に沿ってマネキン上で治療します。この実習を行うにあたっては、分野ごとに学んできた実習の内容を統合的に理解することが必要です。今までは各歯科疾患への対応をそれぞれ学んできましたが、より実際の臨床に近い形で実習を行うことになり、その難しさを感じています。また治療計画を

実践するためには技能を高めることが重要です。

ポリクリでは各診療科のローテーション実習が行われます。形式は講義や模型実習など各診療科によって様々ですが、相互実習も多く含まれています。初めて人間の口腔内で器具を扱うので、模型との違いに苦戦していますが段々と臨床実習に近づいている実感がわき、身の引き締まる思いです。写真は、歯周病科におけるレーザー治療の実習です。うずらの卵の殻を硬組織、黒い斑点を歯石に見立て、レーザーの照射を体験しているところです。

7月にはCBT、9月にはOSCEがあります。これらに合格し、10月からの臨床実習に臨めるよう、知識・技能の両面においてさらに研鑽を積むとともに、コミュニケーション能力など医療従事者に求められることを身に付けていきたいです。



ポリクリ 歯周病科実習にて

歯学部生の今

歯学科6年 齋藤圭人

時が流れるのは本当に早いもので、気が付けば臨床実習も残り僅かとなりました。この度は歯学部ニューズという貴重な機会を頂いたので、この臨床実習を振り返りたいと思います。

私は今、諸先生方、同期である54期のみんなとともに臨床実習に取り組んでいます。新潟大学の特色である臨床実習は、我々歯学部6年生が学生歯科医師として、ご協力して下さる患者さんの一口腔内全体の治療計画を立案し、担当歯科医師として実際に診療に参加するというものです。自分は、臨床実習というシステムがあるからこそこの新潟大学に入学したいと考えておりました。学生時代から手を動かすことができるのは、今後の歯科医師人生の中で大きなアドバンテージになると、そう考えていたからです。しかしながら、そんなにも熱望した臨床実習がいざ始まるうしたとき、自分が最初に感じたのは、大きな不安でした。CBTなどを通して歯学に対する勉強をしました。ファントム模型を使い実技の練習もしました。しかしながら、生身の人間に処置を行うというのは人生を通して初めての体験です。患者さんの口腔内では唾液や血液も出ますし、なにかあれば患者さんは痛みを感じ、最悪の場合、医療事故を引き起こしてしまう可能性さえあります。臨床実習に伴う大きな責任を改めて考えた時、自分にそんなことができるのかと不安で夜も眠れませんでした。

しかし、診療に責任が伴うことは避けて通れない摂理であり、新潟大学の臨床実習ではその責任に答えられるような体制がしっかり整備されています。患者さんの引継ぎを行ってくれた先輩方、診療を行う前には必ずプレチェックを、診療中も温かくも厳しい指導を行ってくださる先生方、自分たちのことを信じ、臨床実習に協力して下さる患者さんのおかげで、私達も学生歯科医師としての責務を全うし、得難い貴重な経験をすることができています。自分の知識や技術の至らなさを思い知らされ、打ちのめされる日々ですが、学んだ知識と実際の診療の結びつきを体感し、少しずつですが自分の不安が自信にかわってきていると実感できます。不安がなくなることは生涯ないとは思いますが、恵まれた環境を存分に利用し、生涯学習を念頭に、これからも診療に臨んでいきたいと思っています。

今年度、とうとうコロナウイルスが5類に移行し、それに伴い歯学部運動会や全日本歯科学学生総合体育大会が数年ぶりに開催されるなど、少しずつではありますが、コロナ前の日常が戻ってきました。そういったイベントにも参加し、時折羽を休めながらもメリハリをつけて今後の臨床実習、国家試験に対して同期の仲間たちとともに日々邁進しようと思っています。

最後になりますが、ここまでお世話になった先生方、先輩方、患者さんにこの場を借りてお礼申し上げます。まだまだ未熟とは思いますが、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。

歯学部生の今

歯学科6年 関 萌 香

私たち6年生は、臨床実習を行っています。今までの時間割から、午前、午後、放課後のスケジュールになり、生活も大きく変わりました。ガイダンスを受けた時は、カリキュラムについていけるか、とても不安でしたが、早くも三分の二が過ぎました。今年は4月から早期臨床実習の患者役実習が行われました。患者役実習とは、6年生が1年生の口腔内診査や清掃指導を行う実習です。6年前は、私たちが患者役だったことを思い出し、月日が経つのは早いものだなと感じます。

臨床実習では、主に総合診療科で1年を通し担当の患者さんの治療を行います。その他に専門診療科で、見学や介助を行います。総合診療科では、様々な治療を経験させていただいております。診療前には、基礎実習、授業、教科書を基に診療内容の準備をし、先生にプレチェックをしていただきます。そして当日診療を行い、診療後にはポストチェック、ポートフォリオで振り返りをします。今まで実習書や教科書で理解の不十分だった部分も先生方とディスカッションしたうえで臨床を経験することで、納得し、日々成長を感じています。また、自然と一つ一つの手順の意味を意識するようになり、記憶にも定着しやすくなりました。それと同時に今までの基礎実習に対する姿勢の甘さや勉強不足も感じました。

各専門科での見学・介助は患者さんとの接し方や技術などを学び、自身の診療に活かしています。さらに、知識や技術だけでなく、責任感や倫理観なども学んでいます。実際に患者さんに接してみないとわからないことや想像できないこともあり、実りある毎日です。失敗してしまうこともありますが、同じ失敗はしないように気をつけています。先生方は、お忙しいときでも、わかりやすく丁寧に指導して下さり、たくさんのことを勉強できています。いつも臨床実習にご協力くださる患者さん、先生方、病院で働く方々に感謝申し上げます。

これまでよりも大学で過ごす時間が長くなり、同級生の存在も大きなものとなりました。技術が上達している姿を見て、周りの成長を感じるとともに、少し焦り、刺激を受けています。また、相談に乗ってくれ、アドバイスをくれる同級生の存在は私の支えとなり、ここまでくることができました。落ち込んでいる時も、技工室でみんなの声を聞くと元気になれます。

最近では医局説明会や研修説明会が行われ、卒業が近づいていることを感じます。国試については、金曜日の放課後に補講が開かれています。サポートして下さる先生方に感謝し、勉強に励んでいきたいです。

残りの実習も少なくなってきましたが、みんなで協力して最後まで気を抜かず、55期の皆さんに引き継げるようにしたいです。

コロナ禍を乗り越え…

口腔生命福祉学科2年 三浦莉里子

入学してからも一年以上経つのかと思うと、時の流れの早さを感じる。無事二年生に進級してからというもの、毎日を忙しく過ごしている。一年生の頃はコロナ禍ということもあり、ほとんどがオンライン授業だった。しかし今となっては全てが対面授業だ。同じ口腔生命福祉学科のみんなと、マスク越しではあるが顔を合わせて講義を受けられることに非常に嬉しさを感じている。一年生では専門科目について学ぶ授業がかなり少なかったため、口腔生命福祉学科に在籍していることを実感しにくかった。だが、歯学部から歯科や福祉に関わる内容を直接教えていただけるようになり、自分が本当に口腔生命福祉学科の生徒であることをひしひしと認識することになった。また四月以降、今までは出来なかった実際に医療・福祉の施設を見学する機会をつくっていただき、自分の肌で現場の雰囲気などを感じられたのはとても貴重な経験だった。画面越し、授業の話だけでは分からない生の声を聞き学ぶことは、他のどの学習よりも理解が進むことを改めて感じた。歯科や福祉に関する更に専門的な授業、加えてPBL式の授業も始まっている。自主的調査と意見交換をメインに進むPBL内での意見交換では多くの刺激をもらっている。自分の考えを上手く伝えるのがいかに難しいかを思い知らされているが、これからのグループ学習にも力を入れていきたい。実習の授業も徐々に始まりつつあり、や

ること・覚えることが山ほどあるが、同士と共に頑張っていこうと思う。

他にも新年度が始まってから嬉しいことがあった。私は江戸千家茶道部に所属しているのだが、先日コロナ禍後初めて開催された「新潟大学開学記念茶会」に参加することができたのである。新型コロナウイルスの流行以来、席での出会いと作法を大切にする茶会は中止を余儀なくされていた。そんな中、開催された開学記念茶会。他流派の茶道部の方々、そして外部のお客さまも交えての茶会に参加するのは大学に入ってから初だった。先生や先輩に教えていただいたお点前をお客様の前で披露したり、季節のお菓子を楽しんだり、と有意義な時間を過ごした。高校でも茶道部に入っていた私にとって、久々の茶会への参加は本当に楽しいものだった。大学での友達を作るきっかけが少なかった中、茶道を通じて学部の垣根を越えた友達も多くできた。この関係性をずっと大切にしていきたい。

今年度は節目の年といえるだろう。なぜなら私事ではあるが、二十歳を迎えるからだ。また将来の進路に関しても徐々に考えなければいけない学年でもあることも理由の一つだ。医療に関わる学部にいる以上、感染対策は引き続き行っていく必要がある。その一方で、今しかない大学生活を楽しみたいとも私は考えている。専門科目の勉強により一層尽力することはもちろん、好きな語学学習にも力を注いでいきたい。自分の興味関心に目を向け、自分がどこでどんな仕事をしたいか考えるためにも「迷ったらまずやってみる」を心がけていこうと思う。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科 3年 三浦 葵

梅雨の季節になりいつも以上にどんよりした天気が続いているなか毎日学校に行くのはためらわれることもあります。頑張っています。大学生活が始まって早くも3年目に突入して日々流れるのがとても速く感じます。毎日学校に行き、友達と顔を合わせ、授業を受けている毎日は忙しいですがとても充実しています。

3年生になって大きく変わったことは2つあります。1つ目は福祉科目の授業が増えたことです。昨年度は福祉科目の授業が圧倒的に少なく、歯科のことを重点的に学んでいました。しかし、今年度は歯科と福祉の割合が半々程になり、その分勉強量も増えました。福祉の授業は主にPBL形式で行われることが多いです。知らないことが多い分自分で調べなければいけないことが多いのでとても大変です。また、福祉の分野では様々な制度や法律があり、日々改正がなされているため新しい情報に追いつくのが大変です。テレビでニュースを見ていて制度や法律の改正のニュースが流れてくると自然と目を向けるようになりました。講義を聞いたり調べ学習を進めたりしていくうちに今の福祉の現状が分かってきて、福祉の手が届かなかった悲しい現実があるとともに、福祉の手が届き笑顔が増えている現実も知り、もどか

しいなと思いました。

2つ目の大きく変わったことは進路について本格的に考え始めたことです。この学科は歯科衛生士と社会福祉士の2つの資格を取ることができるので将来の進路の幅がとても広いと感じています。私は高校生の頃から社会福祉士を目指しているのですが、昨年からは専門的な歯科の勉強をして、知識のみではなく実習も行う中で歯科衛生士の仕事もやりがいがあると思うようになりました。福祉の授業が始まったことにより、福祉分野にもさらなる興味関心を持つようになりました。つい数週間前に4年生の先輩方の公務員試験があったと話を聞いてもうあまり時間はないのだなと思いました。最近は友達と進路について話すことが多く、「夏休みに一緒にこのボランティア行こう」や「この講演会行こう」などの会話をしています。これからの夏休みを有効活用してさらに調べたり、見学に行ったり、ボランティアの活動をしたりして将来について考えていこうと思います。

夏休みが明けてテストを乗り越えたらよいよ大学病院での臨床実習が始まります。実際に患者さんを相手にするのはとても緊張します。今の状態では知識的にも技術的にも不安な部分があるので技術面では限られた実習の時間をしっかり活かし、知識面ではこれからの夏休みを有効に使って補っていきたいと思います。自信をもって臨床実習に臨めるように頑張ります。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科4年 出戸千笑

原稿の依頼をいただき、4年生になった今、これまでの大学生活を振り返らせていただきました。コロナ禍の下でスタートした1年生では、五十嵐キャンパスでの授業が無くなり、知り合いもほぼいなく、思い描いていた大学生活とはほど遠い日々で不安でいっぱいでした。しかし、学校に行く機会が次第に増え、対面の授業を受けたり、おしゃべりをしたり、一緒にご飯を食べたりする中でみんなと一緒に大学生活を過ごせる幸せを感じました。2年生では相互実習が始まり、歯科衛生士の業務を身を持って実感することが出来た一方で、自分の未熟さに気付かされ落胆する場面も多々ありました。様々な不安を抱えて始まった3年生ですが、より専門的な知識・技術を学び、徐々に成長できていると感じました。また、福祉の授業が始まり、普段とは違う目線で物事を見ることで、社会で起きている問題への関心が一層深まりました。あっという間に4年生になり、現在では病院で充実した実習をさせていただいております。そこでは、3年生までの相互実習で経験したことが、臨床の場でどのように使われているのか実際に体験し、病院の歯科医師、歯科衛生士、看護師の方々にたくさん助けをいただきながら、実習に励んでいます。また、一人ひとりの患者さんと向き合う中で多くのことを学ばせていただいていると日々感じています。そして、4年生では他にも1ヶ月間の福祉実習、特論、卒論、就活、歯科衛生士と社会福祉士の国家試験勉強などやるべきことがたくさんあります。しかし、どれも自分の将来について考えることが出来る貴重な

経験となっています。

私の今までの大学生活はいつも不安と隣り合わせでした。分からないこと・出来ないことは今でもたくさんあります。一緒に学ぶ仲間がいなかったらここまで頑張っていたりませんでした。相互実習では出来ているところを褒め合い、出来ていないところはお互いにアドバイスし合いました。病院実習をさせていただいている今も、お互いに助け合いながら駆け抜けています。

今までみんなと学び、不安や、喜びを分かち合った時間を、これからも忘れることはありません。口腔生命福祉学科17期生のみんなには尊敬、感謝でいっぱいです。みんなと一緒に学べたこと、これからも学んでいけることは私の財産です。本当にありがとうございます。



これから始まる実習に向けた記念撮影

令和4年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	田村 浩平 （口腔生命科学）	Occlusal Support as a Predictor of 10-year Mortality Risk in Healthy Community-dwelling 80-year-old Adults (地域在住80歳健常高齢者における10年間の生命予後因子としての咬合支持)
博士（歯学）	清川 裕貴 （口腔生命科学）	Drug-Induced Naïve iPS Cells Exhibit Better Performance than Primed iPS Cells with Respect to the Ability to Differentiate into Pancreatic β -Cell Lineage (薬剤誘導を行ったナイーブ型iPS細胞は、プライム型iPS細胞に比較して、膵 β 細胞系への分化能に優れている)
博士（歯学）	五月女 哲也 （口腔生命科学）	Three dimensional analysis of ingestion focused on the differences in the eating tools (食具の違いに着目した捕食動作の三次元動作解析)
博士（歯学）	朴 沢 美生 （口腔生命科学）	Evaluation of oral function using a composite sensor during maximum lip closure and swallowing in normal children (健常小児における複合センサーを用いた口唇閉鎖機能の評価)
博士（歯学）	小野 喜樹 （口腔生命科学）	Periodontal tissue regeneration involves Wnt/ β -catenin signaling (Wnt/ β -cateninシグナルは歯周組織再生に関与する)
博士（歯学）	三井田 慶斗 （口腔生命科学）	炭化ケイ素繊維強化型新規フェイスガード材料の機械的強さおよび衝撃吸収量の評価
博士（歯学）	山本 悠 （口腔生命科学）	アバットメント締付けトルクによるプレロードが動的荷重付与後のインプラント周囲骨組織に与える影響
博士（歯学）	小林 亮太 （口腔生命科学）	Investigation of signaling pathways regulating both cell motility and proliferation of cultured oral keratinocytes for therapeutic use (培養口腔粘膜角化細胞の運動能と増殖能を制御するシグナル伝達経路の解明)
博士（歯学）	内藤 絵里子 （口腔生命科学）	口腔癌と口腔粘膜に対する重粒子線照射の影響に関する3次元in vitroモデルを用いた研究—異種放射線治療評価の標準化システムの構築—
博士（歯学）	新井 萌生 （口腔生命科学）	Effect of <i>Sparc</i> knockout on the extracellular matrix of mouse periodontal ligament cells (SPARCの欠失がマウス歯根膜細胞の細胞外マトリックスに及ぼす影響の解析)
博士（歯学）	三村 俊平 （口腔生命科学）	ウェアラブルデバイスを用いた骨格性下顎前突症患者における咀嚼行動の臨床的検討
博士（歯学）	吉田 智美 （口腔生命科学）	口腔内装置(OA)の長期使用によって閉塞性睡眠時無呼吸(OSA)患者で生じる形態学的副作用とその予測についての側面頭部エックス線規格写真を用いた研究
博士（歯学）	岩森 大 （口腔生命科学）	Effect of carbonation and thickening on voluntary swallow in healthy humans (健常者において炭酸およびとろみ付けが随意嚥下に及ぼす影響)
博士（歯学）	小貫 和佳奈 （口腔生命科学）	Survey of oral hypofunction in older outpatients at a dental hospital (歯科病院外来通院高齢者における口腔機能低下症の評価と検討)
博士（歯学）	日野 遥香 （口腔生命科学）	Effect of bolus property on swallowing dynamics in patients with dysphagia (食品性状の違いが嚥下障害患者の嚥下動態にもたらす影響)

博士の専攻 分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	秋 森 俊 行 （口腔生命科学）	Search for new diagnostic markers for oral cancer and oral potential malignant disorders using LBC methods (LBC法を用いた口腔がん及び口腔潜在的悪性疾患に対する新規判定用マーカーの検索)
博士（歯学）	善 本 佑 （口腔生命科学）	Effect of Mandibular Bilateral Distal Extension Denture Design on Masticatory Performance (下顎両側遊離端義歯の設計が咀嚼能率に与える影響)
博士（歯学）	浅 見 栄 里 （口腔生命科学）	Anti-inflammatory activity of 2-methoxy-4-vinylphenol involves transcriptional inhibition of lipopolysaccharide-induced inducible nitric oxidase synthase by heme oxygenase-1 (2-methoxy-4-vinylphenolのRAW264.7細胞における抗炎症活性にはHO-1によるiNOS転写抑制が関与する)
博士（歯学）	SAEZ CHANDIA JORGE EDUARDO （口腔生命科学）	Effect of Sake lees (Sake-kasu) on osteoblast differentiation and bone metabolism (酒粕の骨芽細胞分化と骨代謝への効果について)
博士（歯学）	氏 田 倫 章 （口腔生命科学）	三叉神経刺激による三叉神経節細胞興奮の光学的解析：膜電位感受性色素を用いて
博士（歯学）	野 村 みずき （口腔生命科学）	下顎全部床義歯の調整時に加える力のコントロールに関する教育ツールの検討
博士（歯学）	築 野 沙絵子 （口腔生命科学）	Alterations in breathing during food capture in different food type and eating style (食品やその摂取方法の違いによる捕食時呼吸運動の変化について)
博士（歯学）	長 谷 川 静 （口腔生命科学）	歯列交換期の学童における咀嚼能力と体格・身体能力との関係
(早期修了)		
博士（歯学）	磯 野 俊 仁 （口腔生命科学）	Treatment of severe pneumonia by hinokitiol in a murine antimicrobial-resistant pneumococcal pneumonia model (マウス薬剤耐性肺炎球菌性肺炎モデルにおけるヒノキチオールによる重症肺炎治療効果)

令和4年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
修士 (口腔保健福祉学)	坂井 鮎 (口腔生命福祉学)	Changes in oral health status with dental intervention during the acute to subacute stages of stroke. (脳卒中急性期から回復期かけての歯科介入による口腔環境の変化)
修士 (口腔保健福祉学)	田中 淳 (口腔生命福祉学)	都道府県別にみた歯科診療所における在宅歯科医療の現状とその関連要因
修士 (口腔保健福祉学)	中村 夢衣 (口腔生命福祉学)	脳卒中と歯の喪失および身体活動量との関連：魚沼コホート研究ベースライン調査
修士 (口腔保健福祉学)	平原 茉結 (口腔生命福祉学)	Association between number of teeth, nutritional intake and sarcopenia in the elderly. : Baseline survey of Yuzawa cohort study. (高齢者における歯数および栄養摂取量とサルコペニアとの関連：湯沢コホート研究ベースライン調査)
修士 (口腔保健福祉学)	吉田 歩未 (口腔生命福祉学)	定期的歯科介入が行われている施設利用知的障害者の口腔内状態と障害支援区分との関連性
博士 (口腔保健福祉学)	土田 智子 (口腔生命福祉学)	MEMSマイクロ・スペクトロメーター・デバイスを用いた各種フィトケミカル添加による口腔カンジドーシス・常在菌舌粘膜モデルの蛍光スペクトル解析
博士 (口腔保健福祉学)	筒井 紀子 (口腔生命福祉学)	歯科診療所通院患者における不安の要因に関する研究－Modified Dental Anxiety Scale日本語版 (MDAS-J) を用いた分析－
博士 (口腔保健福祉学)	鈴鹿 祐子 (口腔生命福祉学)	歯科衛生士養成校学生の臨床実習におけるストレス反応の実態と関連要因
博士(学術)	高原 稔 (口腔生命福祉学)	児童養護施設のケア効果の検討－「Child Behavior Checklist (CBCL) による入所児童の評価と『新しい社会的養育ビジョン』との比較から」－

新潟大学歯学部新執行部（総務委員会）について

令和5年度より新潟大学歯学部執行部体制が以下の通りになりました。

学 部 長 井上 誠
副 学 部 長（学務担当） 小野 和宏
副 学 部 長（研究担当） 照沼 美穂
副 学 部 長（国際交流担当） 小川 祐司
学部長補佐（副学系長） 前田 健康

学部長補佐（施設担当） 大峽 淳
学部長補佐（広報担当） 寺尾 豊
これにより医歯学総合病院は、総括副院長の多部田康一教授、副院長（学部長補佐兼任）の大内章嗣教授（福祉学講座）、病院長補佐の瀬尾憲司教授（歯科麻酔学分野）の体制変更となりました。

教授人事について

令和5年3月末で定年退職した高橋英樹先生（口腔生命福祉学科 福祉学講座）の後任として、神子島句子先生が着任されました。

名誉教授称号授与について

2022年12月末をもって本学を退職した小野高裕先生に名誉教授の称号が授与されました。

QSランキングについて

2023年3月22日に発表された分野別QS世界大学ランキングの歯学分野において、新潟大学歯学部は日本第2位、世界第51-80位にランクされました（<https://www.topuniversities.com/university-rankings/university-subject-rankings/2023/dentistry>）。QSランキングとは、英国の世界大学評価機関クアクアレリ・シモ

ンズ（QS）がAcademic reputation（研究者による評価）、Employer reputation（雇用主による評価）、Citations per Paper（論文の被引用数評価）、H-index Citations（H-indexに基づく研究評価）、総合評価などをもとに毎年発表している大学ランキングであり、世界で最も広く使われている大学評価指標のひとつです。

令和5年度科学研究費助成事業採択結果について

令和5年度科学研究費助成事業採択結果が発表されました（2023年4月交付内定時点）。新潟大学全体での新規採択件数は167件（採択率25.5%）、新規と継続を合わせた採択件数は713件（直接経費1,188,600千円）であり、歯学部の新規採択件数は16件（採択率47.1%）、病院歯科の新規採択件

数は23件（54.8%）でした。このうち、若手研究の新規採択件数は歯学部2件（採択率66.7%）、病院歯科16件（59.3%）でした。歯学部における大型研究の新規採択件数は、基盤研究Aが1件、基盤研究Bが2件となっています。

令和6年度学長裁量ポイント （スイングバイプログラム）について

歯学系からは、学際融合歯科学分野、摂食機能再建工学の2分野のポスト公募が決定しました。

新潟大学歯学部オープンキャンパス2023

新潟大学歯学部オープンキャンパスが、8月9日（水）、10日（木）の両日開催されることとなりました。今年は対面型（入場者の制限なし）と

Web型を予定しており、対面型では、両日ともに午前、午後の2回のイベントとなります。

4年ぶりの納涼会開催

新型コロナウイルス感染症の拡大以降中止されていた新潟大学歯学部の納涼会を、4年ぶりに7月5日に開催しました。この間赴任されてきたスタッフの

あいさつなどもあり、さらに皆さんの交流が深まり、情報交換の場となってくれたことを願っています。



部活動紹介

軟式テニス部 中 鉢 歩 夢

みなさん、こんにちは。軟式テニス部部长4年の中鉢歩夢です。これから軟式テニス部の紹介をしていきます。

私たちは、デンタルで団体優勝を目指して日々練習に励んでいます。部員は男子8人、女子7人の計15人です。時には腹がちぎれるまで笑い、時には言葉の乱打戦を行いながら和気あいあいと球打ちを行っています。

私たちは医学部と合同で行っており、医学部・歯学部が参加できる北医体はコロナが明けてから何度か参加することはできましたが、歯学生だけで出るデンタルは私たち4年生以下は初めての経験であり、今回のデンタルに参加する人で5年生以上は2人しかいないため、ほとんどの部員が初めての経験です。また、4年前のデンタルでは男子は新潟大学だけでは団体を組めず、連合として出たらしいので、団体を組めること自体が楽しみであり、また、デンタルでは大会だけでなく観光もあり楽しみで胸がいっぱいです。ただ、出るからには必ず勝ちたいと思います。“私たち負けないんで”

男子は軟式テニスの経験者がほとんどですが、女子は大学から始めた人が多く、やっていた人でも中学でしかやったことない人しかいませんが、練習をしていく中で、みんなで切磋琢磨している

ので、日に日に上手になっているのがわかります。最初はサーブやストロークが全く入らなかった人もいましたが、今ではサーブも難なく入り、ストロークではフォアだけでなく、バックまで普通に打てるようになっております。仲間の成長を見るのはとても嬉しいもので、また近年、20歳も超えたことで涙もろくなったせいか涙がこぼれることが多々あり、目に良質なワイパーが欲しいものです。

「テニスは二人で一本」「一球入魂」なんて言葉をよく聞きますが、この二つの言葉はペアへのラブ・一球に対する執着心がなければ成立しない言葉です。つまり、何事にも愛（ラブ）をもっていれば最終的には良い方向に行くとは私は信じています。つまり、“最後に愛は勝つ”のです。

最後に、今5年生の方は今年のデンタルが恐らく最後になり、このメンバーで参加できる大会は最後なので、悔いが残らないような楽しいデンタルにしたいと思います。そして、楽しく仲が良い部活なので、ぜひ新1年生に入ってもらいたいと思います。

参考文献

「ドクターX～外科医・大門未知子～」
「愛は勝つ（KAN）」



春の北医体（著者：前から3列目の右から4番目）

旭町水泳部

旭町水泳部 佐藤 亜紀

こんにちは！旭町水泳部です。私たちは歯学部10名、医学部45名の総勢55名で活動しています。今回は1年間の活動を紹介するとともに、水泳部の魅力をお伝えできればと思います。

普段の活動としては、毎週火、水、土曜日に練習をしています。泳力ごとにコース分けされているので、初心者、経験者ともに自分に合った強度の練習に取り組むことができます。普段は賑やかな部員たちもプールに入ってから真面目な顔つきに変わり、一生懸命メニューに取り組んでいます。私たちマネージャーは、スタート出しやタイム計測などを行っています。

歯学部員の主な大会としては、東日本医歯薬看護学生水泳競技大会とデンタルがあります。昨年までコロナによって大会が中止になっていたのですが、今年の5月に行われた医歯薬は、4年生以下にとっては初めての、5・6年生にとっては数年ぶりの大会で、皆がとても緊張していたのを覚えています。結果としては、個人入賞多数、男子総合8位という成績を収めることができました。そして、8月には歯学部員にとって一番大きな目標であるデンタルが控えています。2020、21、22年と中止になり悔しい思いをしてきたので、今年こそはという思いで待ち望んでいました。選手たち

もこの大会で最高の泳ぎができるようにと日々の練習に励んでいます。部活動最後の年で、部員皆でデンタルに参加できることをとても嬉しく思います。

そして大会以外にも様々なイベントがあるのが旭町水泳部の魅力の一つです。例として、お花見、蛍レク、浜コン、紅葉レク、スキーレク、春合宿などが挙げられます。普段の練習に加えて、季節を感じられるイベントやきついメニューに取り組む合宿を通して、学年や学科の垣根を超えて部員たちとの絆を深めることができます。水泳という競技は基本的に個人競技ではありますが、リレー種目や大会での応援などで団結力が発揮されます！

今回は旭町水泳部についてほんの一部しかお伝えできませんでしたが、このほかにもたくさんの魅力があるので、今後の活動を通して多くの方に知っていただけたらと思います。

最後に、私たちの部活動を支えてくださる顧問の先生方やOB、OGの方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。部員一同、全力で部活動に取り組んでいきますので、今後とも応援の程よろしく願いいたします。



2023年5月28日、医歯薬にて

研修医プログラムを修了して

プログラムA研修歯科医を終えて

歯科臨床教育学分野大学院1年
岩本 佑 耶

昨年度まで新潟大学医歯学総合病院歯科医師臨床研修プログラムAで研修を行い、現在新潟大学大学院歯科臨床教育学分野へ進学いたしました、岩本佑耶（いわもとゆうや）と申します。歯学部ニュースの執筆のご依頼を受け賜りましたので、僭越ながらご拝読いただけると幸いです。

執筆にあたり、これまでの歯学部ニュースに掲載されている同項目を拝読させていただきました。重複するのも退屈かと思われるので、今回は自身の話を織り交ぜながら、プログラムAについてのお話をさせていただこうと思います。

私の研修歯科医生活は、一言でいうと「充実」そのものでした。自宅に帰れないほど多忙な日々を送るのも嫌だし、かといって何もしないで暇な日々を送るのも嫌だと思い、自身で手を動かし、なおかつ指導医の手厚いサポートを受けられる同研修プログラムを志望いたしました。入局に関する一連の説明を受け、配当患者を確認すると衝撃の40名。昨年度の研修歯科医は20名以上いたのですが、私達の代では13名しかいなく、研修歯科医一人当たりの患者の数が大幅に増えたのです。戸惑いもありましたが、同時に自身のスキルアップを確信しました。想像していたよりも多忙な日々を送り、研修歯科医ながら1日に3名の精密印象採得を実施し、その後ラボサイドでの4つのボクシングを行った日は今でも忘れません。そして、自分で製作した補綴物を装着した後の患者さんの笑顔は、一生忘れることはないと思います。

同研修プログラムの研修歯科医は、自身の患者さんの治療だけではなく指導医やほかの研修歯科

医の患者の急患対応をすることもあります。入れ歯が壊れたから治してほしい、という患者さんに対して入れ歯の修理をすると、患者さんは治った入れ歯をつけて笑顔でご退出されます。そして、私も笑顔でお見送りします。

研修歯科医を通して、私はたくさんの方の笑顔を見てきました。心から喜んでくれる方を見ると、自然とこちらも笑顔になります。私にとって「充実」した歯科医師生活というのは、患者さんの笑顔で囲まれている生活なんだということに気づかされました。そして、同研修プログラムを選択したからこそ、たくさんの方と出会うことができ、指導医の指導の下に治療を行うことで、患者さんの笑顔を見ることができました。

COVID-19の規制が緩み、脱マスクと謳われていますが未だに多くの方がそれを実行できずにいます。それでも私たちは患者さんの目を見ることで、笑っているのかどうか判断することができます。そして、その笑顔のマスクの下には、私が製作した補綴物があるのです。



研修歯科医同期と先生方（著者は最奥右から3番目）

臨床研修を終えて

包括歯科補綴学分野大学院1年

山田果歩

「良い義歯が作りたい」

臨床実習の最中に抱いた漠然とした憧れを胸に、臨床研修Bコースを希望し義歯科の門戸を叩いたのが昨年4月のことである。あっという間に過ぎた研修期間は、もう学生ではない自分と歯科医師として半人前にもなれていない自分との狭間で、悩み立ち止まりながら一步一步、そんな1年間だった。

字面ばかりを追いかけてきた生活から一変、乏しい知識とごくわずかな経験を頼りに診療の流れをイメージして臨むが、いざチェアに座ると想像以上に何もできない自分に気付く。良い概形印象とは何か？何をもって筋形成は完了するのか？疑問符で埋め尽くされた外来で、ましてや千差万別の口腔内で臨機応変に対処するためのプランBの準備などでできていなかった。焦り迷い、不十分だと理解しながらも、チェアタイムに余裕がなく指導医に助けを求めてしまう自分を不甲斐なく思うばかりだった。そんな反省を繰り返す日々の中でも充実感を持って前に進めたのは、筆者の疑問にとことん付き合い、義歯治療の面白さを教えてくださった先生方の存在が大きい。そして研修医の筆者が治療を行うことを受け入れてくださった患者さんのご協力があったからこそその半年間だった。

高齢社会の中で口腔管理の重要性が高まる昨今の状況を受け、地元新潟で病院歯科の役割を学びたいと考え、後半は新潟中央病院の歯科口腔外科

で研修させていただいた。「足を悪くしたから…」としばらく歯科受診から遠のいていた患者さんが非常に多く、歯周状態の悪化はもちろん、適合不良となった義歯を無理して使用している方は少なくなかった。周術期口腔機能管理やMRONJ予防を足掛かりに、こちらから積極的に介入して少しでも口腔環境を整えること、そして退院後も継続した口腔管理を行えるよう地域と連携すること、病院歯科の在り方を学び、貴重な経験となった。

もう一つ、義歯科で共に研修を行った2人の同期のことに触れておきたい。成功や失敗、学び得た知識など、毎日顔を合わせる中で自然と共有できる関係性でいられたことに感謝している。3人揃って人工歯排列に苦戦した日々が懐かしい。別々の道を選んだ我々の今後の歯科医師人生のふとした瞬間に、あの半年間を思い出す日が来たら…そう願ってやまない。

1年後に包括歯科補綴学分野の大学院に進学した現在の筆者をかつては想像していなかったが、「良い義歯を作りたい」という当初の思いは変わらず、1年間の研修期間を経てさらに強いものになったことは間違いない。マイペースで不器用な筆者とのディスカッションに毎度お付き合いいただいているオーベンには相変わらず頭が上がらない毎日であるが、去るWBCで日本中を虜にしたO谷選手言葉を借りるならば、いつか憧れを捨て、症例について白熱した議論を交わせるようになっていたい。今は笑われてしまいそうだが、当面は義歯科の師匠たちの背中を追いかけて日々邁進したい。最後に、臨床研修でお世話になった全ての方へこの場を借りて感謝申し上げたい。ありがとうございました。

大学院へ行こう

小児歯科学分野大学院2年 米本裕貴

はじめまして、小児歯科学分野所属の大学院2年米本裕貴と申します。今回は私の大学院進学を決めた経緯について、そして現在感じていることを綴らせていただきます。

私は元々子供が好きだったため小児歯科に興味を持っていました。しかしコロナの制限のため他の診療科も含めて実際の現場を知らない部分が多く、どの道に進むか決め切れていませんでした。卒業後研修医として働き始めていくつも壁を感じましたが、最も大きな壁が小児の歯科診療の難しさでした。教科書的には勉強していましたが、実際に治療となると全く別物でした。患児を寝かせられない、口腔内の状態を精査できない、歯磨きもできないと全くやりたいことができませんでした。研修後も子供に関わりたいと思っていたため、これから子供の診療の度に歯痒さを感じるの嫌だと感じ、大学院進学を決めました。

大学院に残ることは大変ですが学びの質は高く、やりがいを感じる場面があります。小児歯科学分野では講義と実習で知識と手技を確認してから患児の診療に入ります。指導医の先生に患児の背景を踏まえながら診断・治療計画を細かく見ていただき、診療時は内容、手順を確認していただきながら進めます。一回の治療に向けてやることは多いですが、その分治療には集中して臨めますし、学ぶことも多いです。また、治療の前には泣いていた子が最終的には歯医者が好き、また来るねと言ってくれることがあり、そんな時はやりがい、幸せを感じます。

研究は入局当初からプログラミングを学びながら自分で解析を進めています。高校の数学と物理を掛け合わせたようなもので、慣れるまではわからないことが多かったです。それでも研究を進め、学会の場で発表をして興味を持ってもらった時には大きな達成感を感じます。

大学院に残らなければ今頃どんなことをしていたらろうと考えることはあります。それでも残ったことに後悔はしていません。卒業までもう4年かかると否定に思えるかもしれませんが、大きな挑戦をする最後のタイミングかもしれません。歯科医師としての人生を歩み始めた最初の時間の過ごし方はその後の歯科医師人生を豊かにすると思います。それだけでなく、想像よりたくさんのことを学ぶことで診療以外の生活も豊かになると思います。まだ私も今後の人生がどうなっていくかわかりません。少しでも興味があれば勇気をもって一緒に飛び込んでみませんか。



長崎にて（著者は後列の左から2番目）

大学院へ行こう

摂食嚥下リハビリテーション学分野大学院3年 筒井雄平

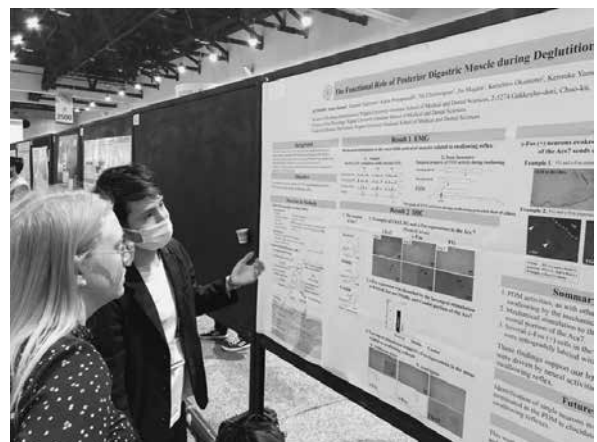
摂食嚥下リハビリテーション学分野大学院3年の筒井雄平です。この度の「大学院へ行こう」の原稿依頼を受けまして、大学院の魅力と可能性を自身の経験と共にご紹介します。

私は、初めから大学院進学を目指していたわけではなく、学生の頃は、卒後は臨床医としてクリニックに勤めるのだらうなあと思っていました。摂食嚥下リハビリテーション学に出会うまでは…。学部4年生の時に日常当たり前としている「食べる」ことが困難となる摂食嚥下障害の存在を知り、井上教授のカリスマ性溢れる講義に圧倒されたことをよく覚えています。病棟実習では、集中治療室での嚥下の診察、ベットサイドでの義歯修理、介護施設への往診などを見学し、その全てが刺激的でした。学生ながら、人の生死に歯科として関わる新たな可能性を感じ、迷うことなく大学院進学を決意しました。かくして、摂食嚥下リハビリテーション学分野の門を叩くわけですが、そこでは教授をはじめロックで型破りな先生たちが待っていました。国内のみならず世界へと歯科の可能性を押し広げようと志を共にする開拓者が集う、国際色豊かな場所でした。

「食べる」ことにとって必須である「嚥下」の機能研究は意外なことにまだまだ発展途上にあり、さらに歯科や口腔機能との関連はほとんど語られていないのが現状です。摂食嚥下リハビリテーション学分野は、国内外問わず、医学、歯学、食品工学など多様な形で摂食嚥下障害の医療を支えるエビデンスを構築し、広めようという機運に満ちています。私も遅れまいと、留学生と共に、指導教員から手技を学び、論文からヒントを得て実験に反映させようという日々を過ごしています。

摂食嚥下リハビリテーション学分野における大学院生のミニマムリクワイアメントのひとつに、海外での学会発表があります。2022年度には、アメリカの2学会（SfN2022、DRS2023）での発表機会をいただきました。なかでもSfNは、約3万人という脳・神経科学を専門とする世界中の研究者が集う大きな学会でした。私の発表テーマである「嚥下」は小さな領域ですが、初めて出会う海外の研究者と意見を交わすことの興奮と充実感には他に代えがたいものでした。今では、毎年この学会に参加するために日々の実験を頑張ることが研究に対する大きなモチベーションのひとつになっています。

最後に、ぜひ4年費やすだけの、やりがい・価値を見出し、やり抜く固い意志を持ってください。私自身、夜通しの実験や論文読みに追われることもしばしばです。ただ、その一つ一つを乗り越えるたびに個が磨かれ、他の誰も代わりが来ない専門家になれると信じています。学生、研修医の皆さんがこの感動と興奮の世界に飛び込んできてくれるのを待っています。



Neuroscience2022 San Diego, USAにて

大学院へいこう

歯周診断・再建学分野大学院4年 笹川花梨

私が大学院への進学を決めた時期は、研修医の時です。新潟大学での歯科医師臨床研修プログラムAに参加し、研修医として臨床業務に携わることになると、治療計画の立案、治療手技および考慮すべき事項など、多くの点で臨床の困難さを痛感しました。その際に、今後の診療業務を行う上で、何かしら軸になる専門性が欲しいと強く感じ、歯周診断・再建学分野に所属し、大学院で学ぶことを選択しました。

入学後は、毎日があっという間に過ぎていきました。微生物感染症学分野で研究を開始した初期は、道具の名前さえも知らず、試薬の濃度計算が間違っていたり、立案した実験計画に致命的な穴があったり、踏んだり蹴ったりの日々が続きました。実験動物に対して、上級生の先生方なら5分程度で終わる処置ですらも、私が行くと、1時間以上かかることがあったときは、自分は何もできない人間なんだと落ち込むことがありました。「今まで使ったことのない神経回路を使っているんだから、苦しいのは仕方ない。どんどんアップデートされていくさ。」と上級生の先生方から受けた助言を胸に、こつこつと研究に向き合う日々を過ごしました。そして気が付けば、大学院4年生に進級し、後続に手技を教える立場になっていました。研究を始めた頃の辛酸を嘗める時期を経験したからこそ、何に自分が苦勞し、どうやって解決したのか、そしてどのようにその経験とノウハウを伝えることができるのだろうか、考えることが出来るようになりました。この神経回路は、研究や臨床のみならず私個人としても有益な、大学院で得ることのできた大きな収穫であったと思います。

臨床について、そんなに基礎研究ばかりしていたら、臨床が全くできなくなるのではないかと思います方もいるでしょう。確かに、研究が中心の院生生活を過ごし、経験できる症例数にある程度の制限がかかってしまうことがあるかもしれません。しかしながら、私が入局した歯周診断・再建学分野では、治療計画立案から歯周基本治療、歯周外科処置、およびその後のケアまで包括的な歯周治療を経験出来る事、また定期的な症例報告会において、様々な先生方の助言を頂けることなどから、臨床の知識や技術を学ぶことが出来ました。

短いようで長い4年間の院生生活、確かに苦勞することはあれど、自身のアップデート期間になることは実感しています。是非とも検討してみてください。



研究室にて後輩と（筆者右）

学会受賞報告

優秀演題賞

第81回日本矯正歯科学会学術大会& 第9回日韓ジョイントシンポジウム 優秀演題賞受賞報告

歯科矯正学分野 三村俊平

この度、第81回日本矯正歯科学会学術大会&第9回日韓ジョイントシンポジウムにて、優秀演題賞を受賞しましたのでご報告させていただきます。演題名は「ウェアラブルデバイスを用いた骨格性下顎前突症患者における咀嚼行動の臨床的検討」です。

骨格性下顎前突症患者では咀嚼機能の低下が報告されていますが、咀嚼行動の定量的評価による検討は十分に行われていません。そこで本研究では、bitescan[®]を用いて骨格性下顎前突症患者の咀嚼行動をモニターし、その特徴を検討しました。

その結果、骨格性下顎前突症患者は個性正常咬合患者と比較し、咀嚼回数が少なく、咀嚼時間が短く、食事中に頭位がより前傾位であることが示されました。

最後になりましたが、ご指導いただきました齋藤功教授、大川加奈子先生をはじめとする歯科矯

正学分野の先生方、包括歯科補綴学分野の小野高裕名誉教授、堀一浩准教授、大川純平先生、そしてご支援いただいた先生方に心から厚く御礼申し上げます。



口演発表（筆者）

第81回日本矯正歯科学会・学術大会 優秀演題賞（ポスター）受賞報告

歯科矯正学分野 山田 貴大

この度、第81回日本矯正歯科学会・学術大会において、優秀ポスター賞を受賞致しましたのでご報告させていただきます。今回受賞した演題名は、「下顎の偏位を伴う骨格性下顎前突症の顎矯正手術後における顎関節形態の変化」です。これまで、下顎の偏位を伴う下顎前突症では顎矯正手術後、非対称な下顎頭運動が改善することが示されていますが、下顎偏位を伴う下顎前突症の顎矯正手術後の顎関節形態の変化については、下顎頭形態、関節腔隙に関する報告が多く、関節隆起後方斜面および下顎窩の深さの変化については明らかにされていませんでした。そこで、外科的矯正治療で治療した下顎骨偏位を伴う骨格性下顎前突者を対象とし、初診時と手術6か月後のCTで顎関

節の形態変化の計測を行い、顎矯正手術後の下顎偏位を伴う骨格性下顎前突症の下顎窩、関節隆起後方斜面、下顎頭、関節腔隙の形態変化を検討致しました。その結果、顎矯正手術による上下顎骨の前後的・水平的な顎骨形態の改善に伴い、非対称な顎関節形態が改善に向かうことが示唆されました。

最後になりますが、ご多忙にも関わらず、貴重なお時間を費やしご教示賜りました齋藤功教授、丹原惇先生、組織再建口腔外科学分野の小林正治教授、顎顔面放射線学分野の西山秀昌先生、研究にご協力頂いたすべての皆様に心より感謝申し上げます。今後とも、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。



学会受賞報告

歯科矯正学分野 大 森 裕 子

この度、2023年3月に開催されました International Conference on Recent Advances in Engineering, Technology and Science 2023 において、“Excellent Paper Award”を受賞しましたのでご報告いたします。受賞演題は、「Accelerated Release Behavior of Ions Loaded in Diatomite by Ultrasound」で、工学部機能材料工学科 三俣研究室との共同研究です。歯科における印象採得は日常臨床において必要不可欠なものである一方、咽喉への印象材流入による嘔吐反射や窒息、誤飲・誤嚥など、予備力の低い患者にとっては常に危険と隣り合わせであると言えます。このようなリスクや患者負担を軽減するために、超音波を照射するとゲルからゾルへ変態する無機粒子-多糖ゲル複合材の超音波応答性に着目し、印象材を硬化させたいタイミングに超音波を照射することで硬化する印象材と超音波発生装置を含めたデバイスの開発を行っています。近年では光学印象装置のような印象材を用いない方法が注目されているものの、費用対効果の観点から従来の方法は今後も必要とされ、

歯科材料における基礎的な研究も同様に継続していくべきであると考えています。

最後になりましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響が残るなか、このような貴重な発表の機会をいただきました本分野の齋藤功教授をはじめ、ご指導を賜りました工学部の三俣哲先生および川合巳佳先生、研究にご協力いただきました全ての皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。



学会会場での表彰式にて、筆者（左）

第46回日本口蓋裂学会総会・学術集会 優秀ポスター賞受賞報告

矯正歯科学分野 寺田 愛希

この度、2022年5月に開催された第46回日本口蓋裂学会総会・学術集会におきまして優秀ポスター賞を受賞しましたのでご報告します。

演題は「新潟大学医歯学総合病院においてPNAM治療を行った片側性口唇口蓋裂児における外鼻形態変化の長期的評価」です。当院では、口唇口蓋裂患児に対して最初の口唇形成手術前に歯槽部の形態および外鼻形態の改善を目的として、Nasalstent付Hotz型哺乳床を用いてPNAM治療を行っています。PNAM治療において初診時から口唇形成術後までの短期的な評価ではPNAM治療により外鼻形態の改善が報告されていますが、長期的な評価の報告は少ない現状です。そこで、5歳時点の外鼻形態に着目し、

PNAM治療の長期的な効果について検討しました。その結果、外鼻形態の面積を算出し外鼻の輪郭を細かく描記することで、距離や角度といった点と直線からなる計測項目では捉えられなかった変化が把握でき、外鼻形態の対称性が良好に保たれることが示唆されました。

最後になりましたが、今回の受賞にあたりご指導いただきました、齋藤功教授、丹原惇先生、市川佳弥先生、小林正治教授、児玉泰光先生、宮田昌幸先生、若槻華子先生、研究にご協力いただいた全ての皆様に心より感謝申し上げます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



学会受賞報告

歯周診断・再建学分野 高橋直紀

この度、日本保存学会秋季学術大会（第155回）にて優秀ポスター賞を受賞いたしました。日本保存学会は保存修復学・歯内療法学・歯周病学の3つの専門分野の研究や教育、臨床に関わる方々で構成されており、本賞は年2回開催される学術大会において優れた研究発表を行った者を表彰するものです。

受賞演題は「超音波スケーラーから発生するエアロゾルに対する吸引装置の飛散防止効果－流体工学および模擬臨床的検討－」で、本学工学部との異分野融合研究によるものです。微粒子可視化装置を用いた流体工学的検討において超音波スケーラーから発生するエアロゾルの特性を明らかにし、模擬臨床試験においては口腔内外バキュームの有用性を示唆しました。これらの結果は、吸引装置の適切な使用が交差感染リスクを抑制できる可能性を示し、より安全な歯科治療の実践への

一助となったと考えております。

本プロジェクトの遂行にあたり、ご指導賜りました多部田康一教授、工学部山縣貴幸先生、加藤光太先生をはじめ、協力頂きました全ての先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



左：筆者 右：多部田教授

第108回アメリカ歯周病学会 General/Basic Research部門 最優秀賞 日本歯科保存学会奨励賞および優秀ポスター賞受賞報告

歯周診断・再建学分野 中 島 麻由佳

この度、第108回アメリカ歯周病学会にて General/Basic Research部門 最優秀賞（医歯薬出版賞）、日本歯科保存学会より奨励賞および松風優秀ポスター賞を受賞致しましたのでご報告いたします。各賞は、学術論文発表「Topical treatment of periodontitis using an iongel (Biomaterials. 276巻 121069頁 (2021年発行))」または学会発表「Cellular Backpack応用による歯周免疫療法の開発研究」に対する受賞となりました。

ドラッグデリバリーシステム（DDS）は、より効率的な薬剤輸送を実現させる製剤技術であり、近年の技術革新により高度に設計されたユニークなドラッグキャリアが様々に報告されています。その中で、私は組織への浸透性に優れるイオン液体とマクロファージをドラッグキャリアとして用いるCellular Backpackを選択し、歯周病の病態形成において鍵となる「感染制御」と「免疫応答制御」の2つの側面に対する新たな治療アプローチを検討し、報告致しました。

今後も更なる検討を重ね、より良い歯周治療法の提供を目標に、歯周DDS製剤の開発を目指し挑戦を続けたいと思います。

末筆ではございますが、本研究の遂行にあたり御指導賜りましたハーバード大学のSamir Mitragotri教授、本分野の多部田康一教授ならびにご協力を頂きました全ての先生方に心より感謝申し上げます。



ご指導いただいた多部田教授（右）と筆者（左）

31st Dysphagia Research Society Annual Meeting, Scientific Abstract Oral Presentation Award 受賞報告

摂食嚥下リハビリテーション学 辻 村 恭 憲

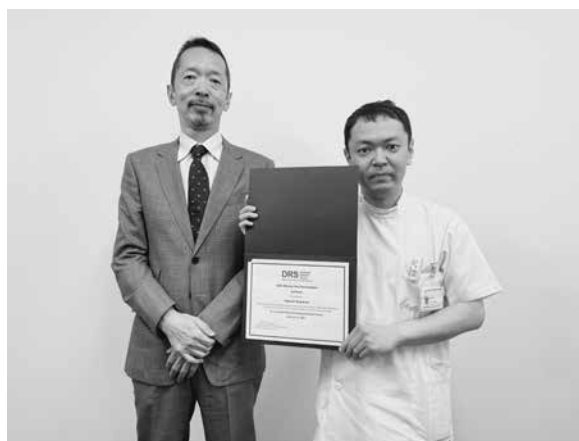
この度、31st Dysphagia Research Society Annual Meeting (サンフランシスコ, 米国) におきまして “Scientific Abstract Oral Presentation Award” を受賞しましたので、ご報告させていただきます。

受賞演題名は “NMDA and non-NMDA glutamate receptors in the rostral-commissural, medial, and ventrolateral nTS subnuclei are involved in the initiation of swallows in anesthetized guinea pigs” で、モルモットを対象として、解剖学的、電気生理学的、神経薬理学的手法により嚥下中枢の神経機構を検討したものです。

私は国際共同研究強化 (A) の資金を得て、2022年9月より2023年3月まで米国東海岸に位置するJohns Hopkins大学 (ボルチモア) に留学させていただいておりました。本学会が3月中旬に開催されたので、帰国直前にアメリカ大陸を横断することとなり少し大変でしたが、留学の集大成としての発表で受賞できたことを嬉しく思っ

います。次は、成果をまとめて、論文として公表する予定です。

研究をご指導くださった摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授ならびにJohns Hopkins大学 アレルギー・臨床免疫学分野のBrendan J Canning教授、留学で不在の間サポートしてくれた当科スタッフに、この場をお借りして感謝申し上げます。



左：井上教授 右：筆者

学会受賞報告

医療連携口腔管理治療部 黒川 亮

第32回日本有病者歯科医療学会総会・学術大会（2023年3月18-19日 長野県）において、「新潟大学医歯学総合病院における経カテーテル的大動脈弁置換術施行患者に対する周術期口腔管理の状況について」という演題で、一般演題優秀発表賞を受賞することができました。

近年、大動脈弁狭窄症の低侵襲な手術法として、経カテーテル的大動脈弁置換術（TAVI）の適応が拡大しています。本学でも、2020年からTAVIが導入されましたが、発表は、その周術期における口腔管理の状況について調査したのになります。

紙幅の都合上、具体的な数字は省略しますが、結果として高い歯科介入率が確認され、TAVI術後合併症の発症率は低値で抑えられていました。また、侵襲的な歯科処置に伴う感染性心内膜炎の発症や手術延期といったトラブルは認められず、歯科介入の安全性についても示唆することができました。

今回の受賞にあたり、ご指導・ご意見をくださいました小林正治教授、新美奏恵先生、佐久間英伸先生、富原圭教授、勝良剛詞先生、医療連携口腔管理治療部の歯科医師・歯科衛生士の皆さんに厚く御礼申し上げます。

また、本発表は、日頃より医療連携口腔管理治

療部の活動にご理解をくださる学内、地域の歯科医療従事者の皆さまに連携をいただいた患者さまのデータの下に成り立っています。

今後も、学会等を通じて、当治療部の活動についてご報告いたしますので、引き続きご協力をいただくと幸いです。何卒、よろしく願いいたします。



受賞の際に頂いた表彰状

歯周診断・再建学分野の紹介

歯周診断・再建学分野 教授 多部田 康 一

1. 沿革

本分野は、1969年に初代小林幸男教授により歯科保存学第二講座として開設されました。当初は歯内療法学と歯周病学を担当していました。その後、1975年に原耕二先生が二代教授に就任し、歯周病学と歯周治療学を中心に教育・研究・診療を担当し、24年間にわたり教室体制を築きました。1999年に原耕二教授が退職し、新潟大学歯学部7期生の吉江弘正先生が三代教授となり、2001年の大学院重点化に伴い「歯周診断・再建学分野」と改称されました。2018年10月より新潟大学歯学部27期の多部田康一が四代教授となり、現在に至っています。

2. 分野の教育

4年生においては歯周病学と歯周病学実習を担当します。歯周病学においては通常の講義において主に病因・病態・疫学的な内容についての歯周病学と歯周治療学について座学としての講義を行っています。歯周病と全身疾患の関わりとそのメカニズムについては、情報の更新が速くすぐに教科書の内容が古いものとなるため、知識を与えるのではなくTeam based learning (TBL) 形式のアクティブラーニングを採用しています。各学生が自己学習し、グループ内で討論し、その内容について学生が相互授業をします。学習過程を重視し、Web、教科書、PubMedから情報収集を行い吟味して発表を行うことで、能動的な学習過程を持たせることが狙いです。実際に将来においても最新の情報の収集とその評価が必要であり、その過程を学ばせたいと考えています。TBLの後に、エビデンスレベルと情報の評価についての講義を行います。この講義は内容が複雑で理解し

にくいとため、TBL後の反転学習として理解度を上げる効果を狙っています。また治療学においては一口腔単位の治療計画についてもTBLで行なっています。これは次年度のポリクリにおいて自分一人で行い、その次の臨床実習では実際の担当患者で行う設計となっており学習過程における接続性を考えたものです。歯周病学実習においては実習書の内容は私が受けたころから内容は変わりませんが、歯周病学会において優れた病態模型の開発や学習用動画の作製に力を入れているため、それを用いることで早くから至適化が図られている状況ではあります。ただし、今の時代に合わせたの対応が何かできないか常に考えているところではあります。

6年生の臨床実習においては、歯科総合診療科における臨床実習に加えて分散実習として治療計画立案実習を行っています。ここでは歯周病科の新患患者さんを学生が担当し、治療計画を立案し、歯周基本治療を経験します。これは原耕二先生の時代から一口腔単位での歯科治療を学ぶ実習として長い間行われてきています。私が学生の時に学んだ際にもとても負荷が高く、インパクトのある実習であったことを記憶します。初診時及び基本治療後の再評価時に行うプレゼンテーションの学習プロダクトとしてのクオリティーは歯周病認定医申請と同じレベルの内容にあり、そのプロダクトを担当した学生だけに留めておくのは効率的でないと考えました。そこで現在は、症例ディスカッション実習として、そのプロダクトについての学生間での相互プレゼンテーションを行なっています。全員が同じ学習プロセスを経ているため、学生は効率的にクラスメイトが経験した症例について考え、新たな視点や知識を得ることが可能となります。また、ディスカッションを通じ

て、自分の考えを整理し、論理的な主張を展開するスキルを向上させることも期待しています。その様子は一人前の歯科医師にも劣らずといった光景も見られ、評価は難しいものの効果があると感じるところです。一方、近年どの分野においても教育の工夫を行うなか、アクティブラーニングの導入を図ってきましたが、やや学生のタスクが多いことも懸念されます。卒前の限られた時間に何をどこまでやるか学生タスクの総量を勘案しての再考は必要であると考えています。

3. 分野の研究活動

歯周病の原因として細菌性プラークの関与が明らかになったのはおよそ僅か55年前であり、歯周病学は比較的歴史の浅い分野です。歯周病による歯周組織破壊の本質は細菌感染と宿主の免疫応答であり、臨床的には細菌性プラーク以外の様々な修飾因子が歯周組織破壊を促進します。そして、原因と病状を促進するリスク因子の除去を軸とした体系的治療学が発展してきました。一方で本邦の歯周病罹患率は依然として高いままであり、より機能的・審美的な状態で、より多くの歯を保存するためには、診断、進行制御、歯周組織の再建

において多くの課題が残っています。また、口腔感染症である歯周病と様々な全身疾患との関連が知られています。これにおいては、より具体的に歯周病と全身疾患の関連やリスクを診断するための客観的指標の開発が必要であり、歯周治療の介入効果が認められて初めて国民の利益になると考えています。このようなことから研究テーマは感染・炎症・免疫・再生・診断といったものがキーワードとなり基礎研究、臨床研究、疫学研究と幅広く行っております。指導教員の研究活動においては、本年度は16人の大学院生（留学生5名）がともに研究活動を行っています。大学院の終了後は専門医を目指して臨床研鑽を行うか、海外留学をすすめています。海外留学を行い研究に専念し、深く考える時間を持つことや様々な価値観に触れることは、将来の大学教員としての教育・研究活動に有益なことはもちろん、将来の進路に関わらず人生の糧となる経験として推奨しています。

4. 分野の臨床活動

難易度を問わず歯周治療自体はすべての患者さんの治療開始時から必要な治療であり、他の専門



令和5年度 歯周診断・再建学分野医局員

診療科と連携をとりながら、一口腔単位での包括治療と長期管理を行います。歯周病科専門外来の特色としては、中等度～重度の歯周病治療における歯周手術や歯周組織再生手術などの専門性の高い治療まで、科学的根拠に基づいた一口腔単位での包括的歯周病治療を提供することです。中等度の歯周炎に対しての専門的介入が歯周炎の進行を防止し歯の喪失を防ぐために有効ですが、患者さんの来院時や紹介を受けた時にはその時期を過ぎてしまっていることも多く、患者さんへの啓蒙活動や歯科医師へのリカレント教育の必要性が課題であり、日本歯周病学会を通してその活動にも取り組んでいます。歯周外科手術においては保険診療における歯周組織再生だけでなく、新規医療技術等管理センターの承認のもとでの歯周組織再生材料と人工骨の併用療法や、特定認定再生医療等委員会の承認のもと培養自家骨膜細胞による歯槽骨・顎骨再生療法（保険外診療）を導入しています。これは患者様から採取した骨膜細胞を用いて、歯周病で失われた歯槽骨の再生を目的とした細胞移植治療を行うものであり、新潟大学での研究成果をもとに、法令順守のもと先進的な治療に

取り組んでいます。

5. おわりに

本分野は1969年の開設以来、歴代教授、諸先輩方の努力により教育・研究・臨床活動において足跡を残してきました。良き伝統を継承しながらも、過去の知見の蓄積、科学技術の進歩を背景に社会や価値観の変化に対応しながら、新しい取り組みにチャレンジしてゆきたいと考えています。同時に、国立大学歯学部を構成する一教室として、社会に必要とされる歯科医師養成、歯科医学の発展のための研究・診療活動を継続してゆく人材育成に重点をおいています。組織の構成員は常に入れ替わるなか、持続的・自律的な活動ができる教室にしたいと考えています。

私たちは歯周診断・再建学分野、歯周病診療室として専門的な教育・研究・診療活動を追求します。ただし、最終的には美味しく食べて、楽しく笑顔で会話をし、健康な生活を送ること、すなわち成熟した日本社会における国民のQOL向上が目標であり、それを見失わぬ活動をしたいと考えています。



摂食嚥下リハビリテーション学分野

摂食嚥下リハビリテーション学分野 辻 村 恭 憲

1. はじめに

当分野は1997年に加齢歯科学講座として開設され、2007年に現在の名称である摂食嚥下リハビリテーション学分野に改称されました。1999年には専門外来として（現）摂食嚥下リハビリテーション外来が開設されています。初代 野村修一教授、2代目 山田好秋教授と引き継がれ、2008年からは井上誠教授が3代目の教授を務めています。現在の構成員は教授1名、准教授1名、講師1名、助教4名、特任助教1名、特任助手2名、医員3名、大学院生14名（うち留学生3名）、臨床歯科研修医1名、産学官連携技術者1名となっています（写真1）。

2. 臨床

摂食嚥下リハビリテーション学分野が病院で担当しているのは口腔リハビリテーション科と摂食嚥下機能回復部です。前者では外来患者、後者で

は入院患者を対象として、主に摂食嚥下障害、口腔乾燥症、味覚障害の治療を行っています。外来棟4階の歯科外来に加えて、摂食嚥下機能回復部が管理する東病棟2階の摂食嚥下リハビリ室があり、ここを拠点として病棟への往診を行っています。また、外来棟5階の歯科嚥下機能検査室では、嚥下造影検査（VF）を実施しています。昨年のVF実施件数は400件以上であり、この検査を通して多くの患者さんが安全な食事摂取条件を知り、禁食の方は食事を開始できています。入院患者の喫食率を高めることは、患者さんの生活の質（Quality of Life, QOL）向上のみならず、入院期間の短縮などを通して病院の経費削減にも貢献しています。

摂食嚥下リハビリテーションを行う上では他職種との連携が欠かせません。摂食嚥下機能回復部で毎週行っている症例検討会には、歯科医師、歯科衛生士に加えて、言語聴覚士および管理栄養士が参加しています。また、入院中の栄養不良患者



写真1 当分野スタッフの集合写真

を主な対象とした栄養サポートチームには、医師（消化器内科、内分泌代謝内科等）、歯科医師（当科）、薬剤師、看護師、管理栄養士が集い、カンファレンスと病棟回診を行っています。

口腔乾燥症や味覚障害患者は増加しているにも関わらず、専門外来は少ないのが現状です。当科では、国立大学で初めてくちのかわき外来を設立し、カウンセリングや東洋医学的なアプローチも含めた診療を行っています。口腔乾燥症、味覚障害には診断ガイドラインがなく、医療機関によって診断や治療方法が統一されていません。4学会合同口腔乾燥症用語・分類検討委員会に参加し、口腔乾燥症の分類を作成したり、口腔乾燥症診療の普及に向けた活動も行っています。

2019年からは歯科総合診療部の協力を得て、歯科外来の新患者を主な対象として口腔機能検査および口腔機能低下症の管理・指導を行っています（写真2）。昨年までの受検者（平均 72.0 ± 9.0 歳）のうち、約35%の方が口腔機能低下症に該当していることがわかりました。開始から5年が経ち、縦断的な調査結果を公表することもできました。今後は口腔機能と身体機能との関連性を調査していきたいと考えています。



写真2 口腔機能低下症の臨床・研究に活躍している小貴先生

3. 研究

当分野の研究は、「嚥下に関する研究」と「嚥下の周辺機能に関する研究」に大別できます。周辺機能については、咀嚼・唾液・味覚など歯科が

主導的役割を果たすべきテーマが多く、いずれも「食べる」ために不可欠な要素です。

ヒトを対象とした嚥下の研究では、筋電図による嚥下筋活動計測、モーションキャプチャシステムによる顎運動などの三次元動作解析、内視鏡やVFによる嚥下運動や食塊移送の画像解析に加えて、経頭蓋磁気刺激（TMS）誘発電位計測などを行っています。加えて、多くの企業と連携して、新たな介護食品や摂食嚥下障害の治療機器開発にも取り組んでいます。動物を対象とした研究では、嚥下誘発に関わる末梢受容体や中枢神経回路の同定、嚥下運動に関わる神経・筋の検証を行っています。また、病態モデルとして脳梗塞モデル動物や慢性閉塞性肺疾患モデル動物を用いた実験も行っています。最近の成果としては、これまで嚥下との関連性が注目されていなかった顎二腹筋後腹の嚥下機能への関与、口腔乾燥を引き起こす抗コリン薬がもたらす水嚥下誘発の促進効果、ATP感受性Kチャンネルと嚥下誘発促進との関連解明などを発表しています。

嚥下の周辺機能に関する研究では、健常者を対象にアトロピンを用いた口腔乾燥が咀嚼・嚥下に与える影響について、様々な食品を用いて検証しています。臨床研究としては、脳血管障害患者の経口摂取再獲得に関連する口腔機能の検索、神経変性疾患における舌圧と嚥下機能の関連、口腔乾燥症と女性ホルモンとの関連、自発性異常味覚に関する研究などを行っています。動物実験では、咀嚼・嚥下時における顎反射の変調や様々な固形物と粉末状の餌を摂取した際の咀嚼機能の発達の違い、咀嚼と嚥下の機能連関に関する研究などを行っています。咀嚼の重要性を基礎的見地から検証することで、“嚥下障害患者はミキサー食の丸飲み”から“形ある物を噛んで食べる”という摂食嚥下リハビリテーションの新たな基盤確立につなげたいと考えています。

4. 教育

学部教育では、歯学科4年次の加齢歯科学および同5年次の摂食嚥下障害学の講義を担当しているほか、早期臨床実習では車椅子実習、地域歯科保健実習では高齢者施設見学実習などを担当して

います。大学院教育では、顎口腔機能に関する研究を幅広く指導し、大学院生向けに抄読会や英語のテキストを用いた輪読会を毎週開催しています。また中・高校生を対象としたひらめき☆ときめきサイエンス（日本学術振興会）、海外の学生や若手研究者を対象としたさくらサイエンスプログラム（科学技術振興機構）などにも継続採択され、学外、国外に向けた教育活動も積極的に行ってきました（写真3）。これら参加者の中から本学歯学部歯学科や当分野大学院への入学が果たされたことは、大きな成果の一つだと思います。



写真3 さくらサイエンスプログラムで高齢者施設を訪れた様子（2017年）。Kulvanich先生（写真左から2人目、現タマサート大学 講師）は、阿賀野市の高齢者施設で介入研究を行い、2022年に博士（歯学）の学位を取得。

5. 地域貢献

要介護高齢者の増加に伴い、新潟県においても在宅や高齢者施設の入所者の安全な食支援が求められています。地域に根差した摂食嚥下リハビリテーションの核となる歯科医師養成を目的として、2012年度から摂食嚥下治療登録医研修制度を行っています。新潟県歯科医師会の支援も受け、今までに27名（うち新潟県内24名）の先生方が研修を修了され、地域でご活躍されています。また、“摂食嚥下障害の在宅診療を支える、情報連携の仕組みづくりを新潟から！”を合言葉に、クラウドファンディングを通じて1600万円を越える

資金を寄付していただき、在宅の摂食嚥下障害患者の医療情報の共有化と多職種連携を円滑に行うシステムの開発にも取り組んでいます。現在は摂食嚥下治療登録医研修参加の先生方に情報共有支援アプリ「OISHIEN」のプロトタイプを使っていただく段階まで進んでいます。その他、産学連携事業として、にいがた摂食嚥下障害サポート研究会（通称サポ研）の企画運営を行っています（<http://www5.dent.niigata-u.ac.jp/~dysphagia/support/>）。サポ研は、新潟県内の摂食嚥下障害への理解促進及び摂食嚥下障害に係る産業の活性化を目的としており、その活動の1つとして介護食品や介護食器具の試食や試用が可能な「食の支援ステーション」を新潟大学医歯学総合病院敷地内（LAWSON横のバス待合室の中）で運営しています。様々な商品が陳列されていますので、ご興味ありましたらお立ち寄りください。

6. 国際交流

当科では、2013年度に「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」が採択されたのを契機に、マンチェスター大学（英国）、ジョンズホプキンス大学（米国）、シカゴ大学（米国）との交流を活発に行っています。さらに2022年度からは「国際共同研究強化（B）」により、ミズーリ大学（米国）との交流も開始しています。また、新型コロナウイルス感染症が落ち着いてきていることから海外交流も再開しつつあります。アジア諸国は、世界の中でも高齢化が進むスピードが速く、新潟大学がリーダーシップを発揮することで高齢者歯科医療および摂食嚥下障害の治療体系や地域医療体制の確立を果たすことが期待されています。今年の6月にはタマサート大学（タイ王国）から大学院生10名が来学し、当科で行っている高齢者医療を中心とした見学を行いました。9月にはマヒドン大学（タイ王国）の大学院生を対象として、同様の研修が予定されています。今後も教室員一同、努力して参りますので、皆様には今後ともご指導・ご鞭撻のほど、宜しくお願いたします。

素 顔 拝 見



顎顔面口腔外科学分野

平 井 秀 明

2023年1月1日付けで顎顔面口腔外科学分野の准教授を拝命いたしました平井秀明と申します。素颜拝見という機会を頂きましたので簡単ですが自己紹介させていただきます。生まれは東京都杉並区ですが、小学校から高校までは茨城県で過ごしました。茨城県立土浦第一高等学校を卒業し、東京医科歯科大学へ進学しました。小さい頃から野球ばかり、大学も野球部に所属していました（ただ観るのはサッカーで鹿島アントラーズの大ファンです）。教養時代の講義で見た舌癌の手術動画に心動かされ、1年生の秋には将来口腔外科の道へ進もうと決めていました。大学卒業後は東京医科歯科大学大学院 顎口腔腫瘍外科学分野へ入局し、口腔がんの第一人者であった小村 健 教授の下、月・水曜日は手術室、火・木曜日は外来教授診察と大学院の4年間は臨床漬けの日々でした。大学院卒業後は、山梨県立中央病院、千葉県がんセンターで研鑽を積み、2010年10月 東京医科歯科大学へ戻り、病棟医長として多くの患者さんや手術に携わることができました。医科歯科は月～金曜の毎日が全身麻酔手術日であり、再建症例も週1-2例、月日の流れは早く、気付いたらアツという間の12年間でした。

さて話は変わり、『深夜特急』という小説を知っていますか？ 沢木耕太郎のユーラシア大陸を横断しロンドンまでの紀行小説です。自分のモットーは『取り合えずやってみる（経験してみる）』、この小説に影響を受けた19歳の自分は、初海外を航空券のみ購入しバンコクへ飛び立ちました。『地球の歩き方』片手にトゥクトゥクを駆使し、運賃

交渉での言い合いや、ホテル探し、屋台での注文など1つ1つが貴重な経験でした。英語は話せなくても何とかなるものだと実感した自分は、その後は台湾、香港、ベトナム、インドとアジアを中心に非日常を味わうため旅をしました（ちなみにインドは本当に、、過酷）。奥さんと出会ってからは再びの台湾、香港に加えイタリア、フランス、メキシコ（マヤ文明のピラミッド観光を何とか説得）へ、子供が生まれてからは国内中心と現在は活動範囲が縮小傾向ですが、そろそろ1人旅を再開し、世界遺産を中心とした非日常に浸かりたい衝動に駆られている今日この頃です。

最後となりますが、新潟大学へは自分の経験を伝えるために来ました。手術はやらないとうまくなりません、だが解剖の知識や結紮・縫合といった基本手技が身に付いていない者は手術をする資格はありません。臨床は妥協せず、オフは皆でお酒を酌み交わすといったアメとムチを使い分け、医局員のレベルアップ＝新潟大学口腔外科の発展となるよう日々努力していく所存です。御縁あって来た新潟の美味しい魚とお酒を満喫したいと思います。今後とも宜しくお願い致します。



歯科総合診療科

都 野 さやか

令和4年4月から歯科総合診療科の特任助教を拝命いたしました、都野さやかと申します。この度、歯学部ニュース「素颜拝見」の執筆の機会をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

出身は新潟県上越市です。上越市も合併してか

なり面積の広い市となっていますが、私は旧上越市高田地区の出身です。桜の名所である高田城址公園が有名で、観桜会の季節になると、普段は静かな町では見たこともないくらいたくさんの方が訪れます。本当に綺麗ですので、まだ行ったことがないという方はぜひ足を運んでみてください。特に夜桜がおすすめなのですが、春とはいえ夜はかなり冷え込みますので、しっかり防寒して行かれることをお勧めします。

運動よりも読書が好き、クラブも合唱と吹奏楽をやっていた小学生時代でしたが、中学入学時に某テレビドラマの影響で友人たちに誘われ、バレーボール部に入部しました。そこからすっかりバレーボールにはまり、気づけば高校入学後もバレーボール部に所属し、勉強はそこそこ頑張り、部活に一生懸命な高校生活を過ごしました。いまでも割と体力と根性はある方だと思っているのですが、これは学生時代の部活動で揉まれた成果かなと思っています。高校卒業後は、元々医療系の職種につきたいと思っていたことと、歯科医師である父の影響もあり歯学部を受験、46期生として新潟大学に入学し、頼もしい同期に恵まれて充実した6年間を過ごすことができました。また大学時代もバレーボール部に所属していたため、同期をはじめたくさんの先輩方・後輩達と活動できたのもよい思い出となっています。

大学卒業後は、新潟大学医歯学総合病院での臨床研修と1年間の後期研修を行ったのちに、歯科臨床教育学分野にて大学院を修了させていただきました。現在は、歯科総合診療科にて研修医の先生の指導と、学部実習（主に早期臨床実習Ⅰ）を担当させていただいています。指導する立場になると、改めて自身の知識・技能で曖昧なところが浮き彫りになり、逆に教えてもらっていることが多いような気がしてしまう日々ですが、皆さんに負けずに自分自身も成長できるように頑張っていきたいと思っています。最後になりますが、未熟ながら新潟大学歯学部の発展に少しでも貢献できるよう精進してまいりたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくをお願いいたします。



歯科麻酔科

山本 徹

令和4年12月1日付で歯科麻酔科の助教を拝命いたしました、山本 徹（やまもと とおる）と申します。このたび「素顔拝見」の記事を寄稿させていただく機会を頂きましたので、この場をお借りして自己紹介や近況について記したく存じます。

出身は広島県呉市の瀬戸内海に面する港町です。新潟市も歴史ある港を有し、なんとなく同じような景色もあったりして勝手に親近感を抱いている今日この頃です。

私は2008年九州歯科大学を卒業後、九州歯科大学大学院で博士号を取得し、鶴見大学で助教として歯科麻酔学の学生教育・臨床・研究に従事してきました。その後、東京医科歯科大学麻酔生体管理学分野を経て、2017年4月から2021年3月まで4年間米国University of California, Los Angeles (UCLA) に留学し、慢性頭痛と神経障害性疼痛について痛みの基礎研究を行っていました。パスポートやVISAの更新をしながら、税制上の居住者（永住権、いわゆるグリーンカードの前の段階、州税や連邦税を納め、陪審員の招集案内も届くという微妙な立ち位置）として地域のコミュニティに溶け込み生活していましたが、米国での仕事が一区切りつき、帰国先を探していたところ、ご縁あり新潟大学に来させていただくことになりました。

ロサンゼルスでの生活からありとあらゆることが一変し、なかなかすぐに適応できない自分に情けなさを感じながらも、瀬尾憲司教授、岸本直隆准教授、田中裕統括医局長をはじめ、医局の先生方や関係する皆様に大変良くしていただき、感謝申し上げます。

2014年に歯科麻酔学会専門医を取得していたものの、海外留学のため一旦資格停止措置となり、再び専門医試験を受験できる要件が揃ったため、

この度復帰を目指して2回目の受験となりました。無事専門医資格を回復し、「また取れば良い」という前例を見せることができたので、これから海外留学に興味を抱く後進がいれば臆せずチャレンジして行ってほしいと思います。

私生活では、昨年6月に娘が生まれ、共働きのため、あゆみ保育園への送り迎えをしております。学内を抱っこ紐で娘を抱いて歩く姿を見かけましたら、温かく見守っていただければ幸いです。

歯科麻酔学の臨床・研究・教育を通じて新潟大学歯学部的发展に少しでも貢献できるよう微力ながら力を尽くしていきたいと思います。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



University of California, Los Angeles (UCLA)の留学先Labでの誕生日会ランチのひとつ。日本人は私1人。フランス、ロシア、インド、ポルトガル、アメリカ各地からの研究者たちと。



コレステロールは口腔扁平上皮癌における Caveolin-1 の局在と細胞遊走能を制御する

口腔病理学分野 山 崎 学

研究の背景

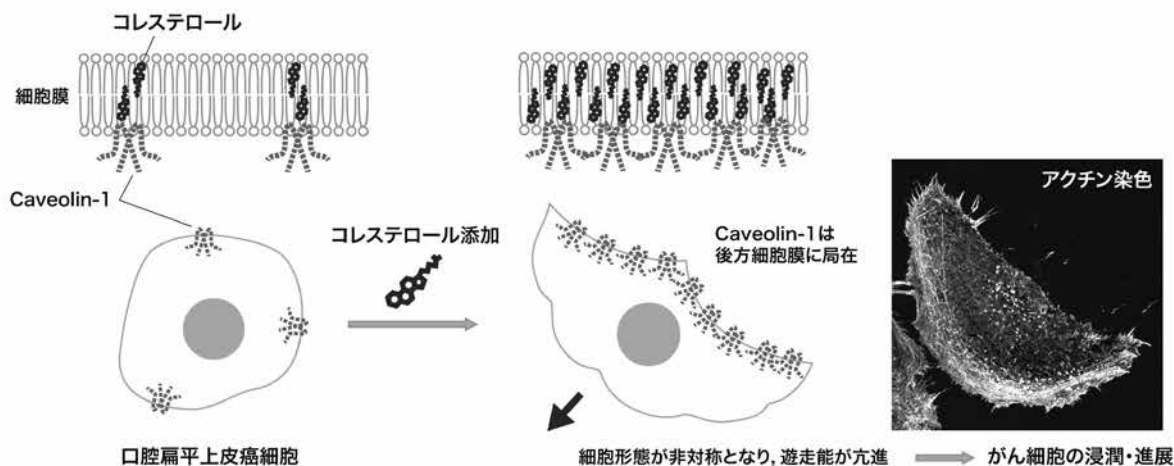
コレステロールは細胞膜を構成する主要脂質成分であるとともに、ステロイドホルモンを合成する原料でもあり、生体に必須の物質です。しかしながら、血中コレステロールが高い状態が持続すると動脈硬化症などのリスク上昇につながります。これまでの研究では、正常組織に比べ、がん組織にはより多くのコレステロールが含有されていることが示されていましたが、口腔扁平上皮癌細胞におけるコレステロールの役割について十分に解明されていませんでした。

研究成果

私たちはコレステロールの細胞内輸送に関わる Caveolin-1 (CAV1) に注目して、コレステロールががん細胞の機能に果たす役割を検討しました。口腔扁平上皮癌由来の培養細胞に対して細胞

内コレステロールを人為的に増減させて、タイムラプス観察で細胞の挙動を観察したところ、コレステロール量を減少させたがん細胞は縮小し、細胞遊走能が低下したのに対して、コレステロール量を増加させたがん細胞は葉状突起の伸長を示して非対称的な形態へと変化し、細胞遊走能が亢進しました。この際、コレステロール添加細胞では CAV1 は進行方向に対して後方の細胞膜に局在し、本現象が細胞極性形成に関与することがわかりました (図)。

次に、口腔扁平上皮癌の病理組織標本において、CAV1 の発現を免疫組織化学的に検討しました。がん細胞は CAV1 を強く発現していましたが、がん細胞における CAV1 細胞膜陽性率が症例により大きく異なる点に注目して、CAV1 細胞膜陽性率と臨床病理学的因子との相関を解析しました。その結果、CAV1 細胞膜陽性が多くみられる腫瘍ほど、リンパ節転移をきたしやすい



Chan NN, et al. Cholesterol Is a Regulator of CAV1 Localization and Cell Migration in Oral Squamous Cell Carcinoma. Int J Mol Sci 2023, 24, 6035より改変

図 コレステロールを添加した口腔扁平上皮癌細胞では、Caveolin-1が後方細胞膜に局在し、細胞形態の非対称性と遊走能亢進が誘導される

く、臨床病期が進行していること、さらに術後の無再発生存率が有意に低いことが判明しました。

本研究により、コレステロールはCAV1細胞膜局在の制御を介して口腔扁平上皮癌細胞の遊走能を高めることで、口腔がんの進展に寄与する可能性が示されました。

今後の展開

脂質異常症の治療には血中コレステロールを下げる薬剤が広く使用されています。今後、このような薬剤が口腔扁平上皮癌の発生・進展にどのように作用するのかを解明して、コレステロールを

標的とした新規治療法開発につなげていきたいと考えています。

紹介論文情報

Chan NN, Yamazaki M, Maruyama S, Abé T, Haga K, Kawaharada M, Izumi K, Kobayashi T, Tanuma JI. Cholesterol Is a Regulator of CAV1 Localization and Cell Migration in Oral Squamous Cell Carcinoma. *International Journal of Molecular Sciences*. 2023; 24(7): 6035.

doi: 10.3390/ijms24076035.



新潟歯学会報告

令和5年度第56回新潟歯学会総会報告

令和5年度新潟歯学会集会幹事
小児歯科障がい者歯科
大島邦子

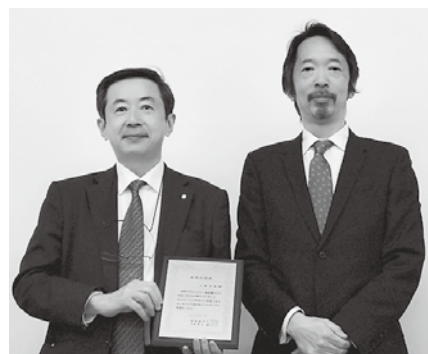
令和5年度第56回新潟歯学会総会は4月15日(土)に開催されました。昨年度まで新型コロナウイルス感染症対策のために会場参加者を演者と評議員に限定させていただいておりましたが、今回より会場参加者の限定をなくし、講堂を主会場、第一講義室をサテライト会場として活用することで密を回避しつつ、多くの来場者をお迎えすることができました。

総会では、井上誠新会頭のご挨拶の後、会務報告、昨年度の会計決算報告・会計監査報告がなされ、今年度の事業計画案と予算案が承認されました。また、小野高裕包括歯科補綴学前教授、高橋英樹福祉学前教授が名誉会員として承認されました。2022年度の新潟歯学会賞は浅見栄里先生(組織再建口腔外科学分野)、新潟歯学会奨励賞は新井萌生先生(歯科矯正学分野)に授与されました。おめでとうございます。

総会議事に続き、午前10時40分から7題の一般口演が行われ、活発な討議がなされました。

午後1時からはソウル・Yonsei大学のHan-Sung Jung教授による“Epithelial plasticity enhances regeneration of committed taste receptor cells following nerve injury”と題する特別講演が行われました。コロナ禍明けの久しぶりの特別講演に海外から演者をお招きすることができ、社会の大きな変化を感じるとともに、多くの素晴らしいスライドを直に拝見し、国内外を含めた人的交流がさらなる歯学の発展に寄与することを実感した講演でした。

当日は、現地80名、Zoom12名の参加がありま



小野高裕名誉教授と井上会頭



新潟歯学会賞授与
浅見栄里先生(左)と井上会頭



新潟歯学会奨励賞授与
新井萌生先生(左)と岸本准講会幹事

した。座長をお引き受けくださった先生方、演者
および参加された皆様、ありがとうございました。

令和5年度第2回例会は11月4日（土）に同会
場で開催予定です。詳細は新潟歯学会ホームペー
ジをご覧ください。（[https://nds.dent.niigata-u.
ac.jp](https://nds.dent.niigata-u.ac.jp)）



特別講演Prof. Han Sung Jung





同窓会だより

4年ぶりのリアルな〇×

副会長 野内 昭 宏

ここ最近、「4年ぶりの開催」という見出しなどをよく見かけます。そう、COVID-19が日本に上陸した2020年の年頭から、あらゆる会合等の開催の自粛、中止、またはWEBでの開催が要請されてきました。しかし、この5月から感染法上の位置づけが2類相当から5類になったのを契機に、(もちろん、適切な感染対策をしての上ですが)社会経済活動を回していこうということで、少しずつ以前の開催形態に戻りつつあります。

当然、同窓会活動もその影響を受けました。例えば、同窓会創立50周年記念事業に関する会議は、そのほとんどがZOOM上での開催でした。ZOOMの「ズ」の字も知らなかった4年前とは隔世の感があります。

50周年といえば、記念事業の一つに「歯学部への記念品贈呈」があります。歯学部と相談の上、「WEB会議システム一式」を贈呈することとなり、目録は昨年の記念式典の際に贈呈しました。実際のシステム構成については歯学部と検討を重ねた上で講堂と大会議室に導入しまして、2023年の年頭から本格稼働できるようになりました。

今年度最初の当会の総会と学術講演会に際して

は、そのシステムを使ってハイブリッド形式で行いましたが、今まで構築していたシステムよりも、ずっと快適に行うことができました。さて、その他の活動報告です。

昨年12月末で大学を退職された小野高裕教授、そして、この3月末に定年退職された高橋英樹教授と天谷吉宏准教授に、それぞれ退職の記念品をお贈りしました。3名の先生方のご健勝とご活躍を祈念しております。



小野教授、高橋教授、天谷准教授

また、例年通りに歯学科53期生45名・口腔生命福祉学科16期生24名の名前が刻まれた卒業生ネームプレートも設置しました。学部4階渡り廊下にはこのネームプレートとともに、過去の卒業生全員分のプレートが掲示されています。学部にお越しの際には是非、ご覧ください。



2023年度総会 ZOOM参加者と一緒に記念撮影



4月には総会と学術講演会が行われて、今年度の活動を開始しました。

6月に入ってすぐに「研修歯科医支援塾」が行われました。大学院生や勤務医になられた前・研修医さんや先輩の先生等から講師になっていただ

き、「研修医時代の話」「進路の決め方」「現在の生活」等を楽しくお話をして頂きました。研修歯科医の皆様の、現状の悩み解決、進路決定、将来のビジョンの描き方等の参考になりましたでしょうか。



講演される松崎奈々香先生（歯学科48期）と日向 剛先生（歯学科41期）



講演終了後に講師の先生を囲んで

その2週間後には、「歯学科6年生・口腔生命福祉学科4年生への同窓会説明会」を開催しました。ここ3年間はYouTubeなどで動画配信を行っての説明会でしたが、今回は4年ぶりに対面での開催に踏み切りました。

同窓会の活動内容の説明会のみで交流会（懇親会）は開催しませんでした。学生さんの顔を見て直接お話しできるのはありがたいと思いました。参加された学生の皆さんが来年3月に無事卒業され、歯学科54期、口腔生命福祉学科17期として同窓会正会員になれるのを祈りたいと思います。

これからも同窓会からは様々な方法で同窓会員

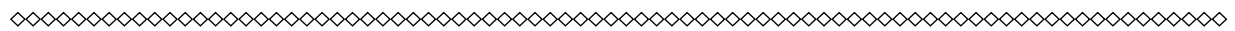


説明会冒頭の有松会長の挨拶

に情報を発信し、会員相互の親睦を図り、暖かく、かつ、強い同窓会を目指してまいります。ご理解とご協力をよろしくお願いしたいと存じます。



説明会後に出席者全員で撮影



講演会を拝聴して

歯学科25期生 古室 浩明

野村教授の同窓会学術講演会を拝聴し、最近の保存の事情が垣間見えた気がしました。

私は25期生なので卒後30年経っています。当時新大歯学部で最新の教育を受けてきたわけですが、今は当時とは全く違う内容になっていて時代からだいぶ取り残されているのを痛感しました。

『モダン・エンドドンティクスの実際』では三種の神器の必要性が説かれ、難治性の感染根管をどこまで除菌化していったら予後が良いかをラットの研究を通して話されていました。75%の除菌で75%の根尖病巣が治癒という件は臨床実感とも一致すると思いました。

『AI時代の歯内療法』では難治性根尖性歯周炎に対してルートZX3の高周波照射で50-60%の有効性を示す話や自己血製剤、NiTiファイルと専用アプリで根管形成の全自動化の話がありました。私には何といても全自動電動歯ブラシの話が印象に残りました。

『う蝕予防管理の実際』では専門医制度、国民皆歯科健診の話から現在の新大歯科外来の姿に話は移り、重点はドリル&フィルに置かずICDASによるリスク評価に基づくう蝕管理を行っているとのことでした。また根面う蝕を歯肉縁上型、越

境型に分け、その細菌叢の違いを遺伝子解析により研究しているとのこと。先生の研究が進めば厄介な根面う蝕の予防管理が期待できそうでした。

『変わりゆくう蝕治療』ではリスクの高い人や歯に対して口腔機能管理を徹底し、早期発見・長期管理でう蝕をつくらず、治療をしない時代に突入していることを伝えていました。そして主役は歯科医師から歯科衛生士へと締めくくっていました。

思えば30年ほど前、我々が学生時代の頃からこれからは予防の時代だと言われていました。しかし当時予防で食っていくのは難しく、ドリル&フィルの保存や補綴がまだまだ主役でありました。歯科医院の院長は、経営と社会貢献の2足のわらじを履かざるを得ない。治療重視は必要悪という面が強かったように思います。

近年インターネットによる検索で医師のみが知

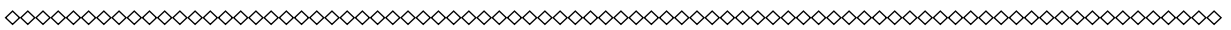


講演後、野村先生には感謝状を贈呈しました



りえたことが容易に患者さんにわかるようになってきました。ことに生成AIの進歩は目覚ましく、口腔内写真やレントゲン写真からう蝕や歯周病の診断に類することをこなしてしまう。すると歯科における知識や診断の専門性が低下し、患者さんからの信頼関係の低下に結びつく。

働き方改革による代替、時短も叫ばれている。我々はいったい治療という仕事の位置付けをどう落とし込んでいけばいいだろう。そして我々のあるべき歯科医師とはどんな姿だろう。いろいろ考えさせられる講演会でした。



セミナー（地域のインフラ歯科になろう！～医療インフラとしての歯科医院～）を受講して

歯学科53期生 石 崎 絵 理

「地域のインフラ歯科になろう！～医療インフラとしての歯科医院～」を受講いたしました。私は歯科医師1年目で進路も具体的に決まっていなかった状況でした。ただ両親が地方で開業しており、ゆくゆくは継いで行きたいと思っており、今後の歯科医師人生の中で何か役立つのではないかと受講にいたしました。

特に印象的であったことはインフラ歯科という考えでした。渡部先生のおっしゃるインフラ歯科とは「通院患者だけでなく、地域全体を対象とすること、幅広い分野の診療を行うこと、生涯を通じて健康を守ること」です。患者さんとの点や線でのかわりではなく面での関わりという考え方です。新潟大学病院総合診断部で研修をしている私にとって、患者さんが来院されることを前提として診療が行われているため、地域全体を対象にしていることや生涯を通じてメンテナンスを行う考えは新鮮でした。大都市圏、とくに大都市近郊での高齢者の激増、地方部での高齢化率の増加により治療からケアへ、ケアから予防へ生涯メンテナンスの考え方は、今後の歯科医療に非常に重要な考え方だと感じました。要介護高齢者の調査では、歯科医療や口腔健康管理が必要である高

齢者は64.3%でありましたが、そのうち、過去1年以内に歯科を受診していたのは、2.4%であったことから地域包括システムに歯科が今後係わっていく必要性を強く感じました。また渡部先生ご自身のお話の一部に、地域全体が歯科を受診できるように介護施設へのボランティアを始めたことや、子どもに対して生涯に渡って継続的に受診するようにわかりやすく紙芝居を使用し説明しているとあり、献身的なお人柄だと感じました。そして最終的に地域全体で子どもの頃から口腔ケアの重要性を理解し、一生涯自分の歯で食事ができることができるようになれば理想的だと思いました。

講演を拝聴し、内容もわかりやすく、今後歯科医師としてどのように歩んでいきたいか考える良い機会となりました。最後に、講演していただいた渡部先生、セミナーを企画してくださった学術委員の皆様へ御礼申し上げます。



講演中の渡部先生



教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	R4.12.31	小野 高裕		包括歯科補綴学分野教授
任期満了	R4.12.31	弦 巻 立		歯科麻酔学分野助教
採用	R5.1.1	平 井 秀 明	顎顔面口腔外科学分野准教授	東京医科歯科大学病院
任期満了	R5.2.10	小 川 友里奈		口腔保健学分野助教
任期満了	R5.2.28	坂 井 遥		摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助手
定年退職	R5.3.31	高 橋 英 樹		福祉学分野教授
定年退職	R5.3.31	天 谷 吉 宏		口腔生化学分野准教授
退職	R5.3.31	飯 田 和 泉		歯学教育開発室助教
任期満了	R5.3.31	鈴 木 絢 子		生体組織再生工学分野特任助教
昇任	R5.4.1	山 崎 学	口腔病理学分野准教授	口腔病理学分野講師
採用	R5.4.1	神子島 旬 子	福祉学分野教授	新潟県
採用	R5.4.1	ROSENKRANZ Andrea Lynn	高度口腔機能教育研究センター助教	
採用	R5.4.1	石 田 陽 子	歯学教育開発室特任准教授	歯学教育開発室特任講師
採用	R5.4.1	LAY THANT	高度口腔機能教育研究センター特任助教	医歯学総合病院 矯正歯科 特任助教
採用	R5.4.1	山 田 真 子	摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助手	摂食嚥下リハビリテーション学分野産学連携技術者
採用	R5.4.1	坂 井 遥	摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助手	医歯学総合病院摂食嚥下機能回復部特任助手

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
任期満了	R5.3.31	山 田 真 子		摂食嚥下リハビリテーション学分野産学連携技術者
昇任	R5.4.1	山 崎 和 彦	学務部教務課副課長	医歯学系歯学部事務室学務係長
異動	R5.4.1	渡 部 康 雄	医歯学系歯学部事務室学務係長	自然科学系農学部事務室学務係長
異動	R5.4.1	五十嵐 未 来	学務部留学交流推進課留学生係	医歯学系歯学部事務室総務係
採用	R5.4.1	杉 江 あきの	医歯学系歯学部事務室総務係	

病院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	R5.3.31	児玉泰光		顎顔面口腔外科講師
退職	R5.3.31	永井孝宏		顎顔面口腔外科助教
退職	R5.3.31	鈴木拓		摂食嚥下機能回復部助教
任期満了	R5.3.31	小川信		高度医療開発センター特任助教
採用	R5.4.1	朴沢美生	小児歯科・障がい者歯科助教	
採用	R5.4.1	小貫和佳奈	摂食嚥下機能回復部助教	
採用	R5.6.1	大川加奈子	矯正歯科助教	
採用	R5.7.1	隅田賢正	顎顔面口腔外科助教	顎顔面口腔外科専任助教

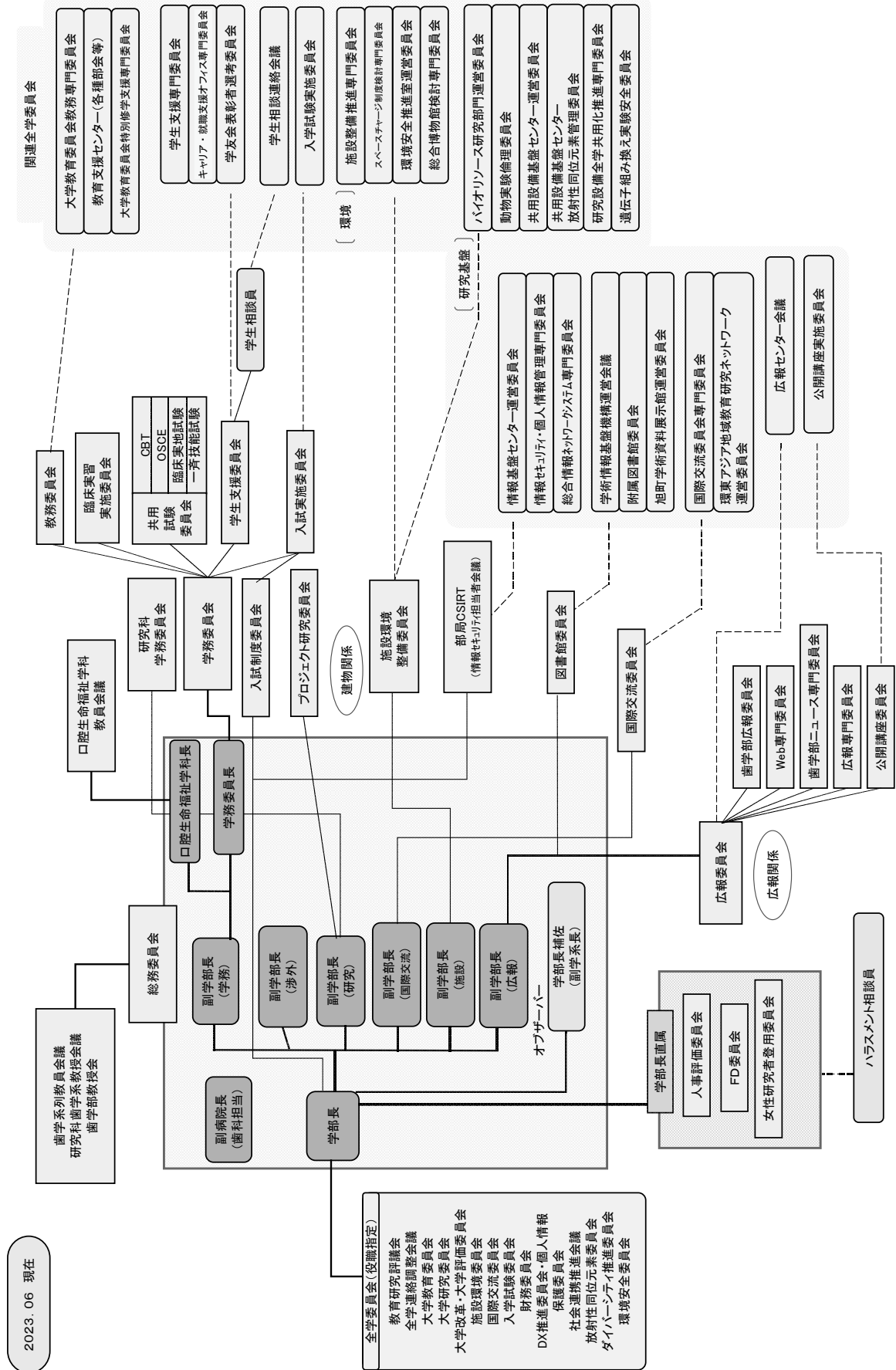
【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
育児休業	R4.12.3	阿部春奈		歯科衛生部門歯科衛生士
退職	R4.12.31	川島美咲		歯科技工部門歯科技工士
育児休業	R5.2.28	筒井亜香里		歯科衛生部門歯科衛生士
任期満了	R5.3.31	沖津佳子		歯科衛生部門歯科衛生士
任期満了	R5.3.31	井川愛		歯科衛生部門歯科衛生士
採用	R5.4.1	佐藤秀行	歯科技工部門歯科技工士	
採用	R5.4.1	清水浩紀	歯科技工部門歯科技工士	
採用	R5.4.1	吉岡奈穂美	歯科衛生部門歯科衛生士	
採用	R5.4.1	桜井花菜	歯科衛生部門歯科衛生士	
採用	R5.4.1	室橋波菜	歯科衛生部門歯科衛生士	
退職	R5.3.31	漆間希恵		外来（歯科）
退職	R5.3.31	遠藤千佳		外来（歯科）
所属換	R5.4.1	山田民子	外来（歯科）看護師	西病棟6階
所属換	R5.4.1	相場祥子	外来（歯科）看護師	患者総合サポートセンター

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	R5.3.31	木 伏 哲 夫		管理運営課管理係長
退職	R5.3.31	今 村 尊 博		医事課医事総括係長
昇任	R5.4.1	白 田 隆 太	総務課副課長（総務）	財務部財務企画課企画調整係長
昇任	R5.4.1	雲 越 健	経営企画課経営分析係長	経営企画課主任
昇任	R5.4.1	中 村 克 純	管理運営課管理係長	財務部財務企画課主任
配置換	R5.4.1	小 島 清 市	財務部財務管理課副課長	経営企画課副課長（財務企画）
配置換	R5.4.1	佐 藤 聡 子	総務課人事係長	学務部キャリア支援課就職情報係長
配置換	R5.4.1	中 澤 文 子	医事課医事総括係長	医事課収入係長
配置換	R5.4.1	村 山 登	医事課収入係長	総務課専門職員
配置換	R5.4.1	長 橋 崇 之	医事課医療安全係長	医歯学系総務課学系企画係長
配置換	R5.4.1	斎 藤 こずえ	総務部人事企画課専門職員（新潟県 地域医療推進機構魚沼基幹病院出向）	医事課審査係長
配置換	R5.4.1	倉 田 貴 浩	学務部入試課入試実施係長	医事課医療安全係長
配置換	R5.4.1	滝 沢 美 穂	研究企画推進部社会連携課知的財産係長	総務課人事係長

《歯学部各種委員会》



編集後記

まず初めに原稿執筆をご快諾いただきました先生方ならびに学生さんにこの場をお借りして感謝申し上げます。またご協力いただきました歯学部学務系の皆様、編集長および編集委員の先生方にも深く御礼申し上げます。歯学部ニュースには過去何度か寄稿した記憶がありますが、編集として関わらせていただく中でこの冊子が出来上がるまでに多くの方がご尽力していらっしゃることを改めて実感することができました。今後も歯学部ニュースが素晴らしい情報の発信源として活躍することを願っております。

顎顔面放射線学分野 小林 太一

この度はお忙しい中、原稿執筆にご協力いただきました先生および学生の皆様に心より感謝申し上げます。いつも歯学部ニュースを楽しみに拝読しておりましたが、今回初めて編集委員を担当させていただきました。多くの先生方や学生の皆様のご協力の元、無事に発刊することができ、貴重な経験をありがとうございます。今年からは歯学部としての活動が増えることが予想されますので、皆様のさらなるご活躍をお祈り申し上げます。

口腔保健学分野 小田島 あゆ子

歯学部ニュースは学生の頃より拝読させていただいておりましたが、今回初めて編集に携わらせていただき、多くの方のご協力のもとに発行されていることが改めてわかる良い機会となりました。原稿執筆に快くご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

新潟大学歯学部の活動を発信する広報誌としての役割を願い、次号以降も楽しみにしております。

小児歯科・障がい者歯科 笹川 祐輝

この度はお忙しい中、快く原稿執筆にご協力いただきました先生、学生の皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。令和3年度に原稿の執筆をさせていただいたことはありましたが、編集委員をこの度初めて担当させていただき、多くの方のご協力のもと発行されていることを実感いたしました。今後も歯学部ニュースが新潟大学歯学部の活発な情報発信の場となることを願っております。

う蝕学分野 外園 真規

この度、歯学部ニュース143号の編集長を務めさせて頂きました。本年3月13日よりマスク着用が個人の判断となり、新型コロナウイルス感染症への感染対策に配慮しつつ、ようやく対面での懇親会なども開催できるようになってきました。143号では入学者に対する特集を組んでおり、多くの新入学生にフレッシュで、希望にあふれた記事を執筆して頂きました。また新入学生に対して、井上歯学部長、多部田副院長より温かい歓迎のメッセージを頂いております。その他にも興味深い記事が多数掲載されております。原稿執筆に快くご協力いただきました先生方、職員の方々および学生さんに厚く御礼申し上げます。

歯科麻酔学分野 岸本 直隆

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ：

撮影地：新潟県燕市（安了寺）

撮影日：2023年5月

使用機材：OLYMPUS PEN-F/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO／絞り：F4・シャッター速度：8分の1秒（絞り優先自動露出・露出補正-0.3）

裏表紙の撮影データ：

撮影地：新潟県胎内市（乙寶寺／乙宝寺）

撮影日：2023年7月

使用機材：OLYMPUS PEN-F/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO／絞り：F4・シャッター速度：400分の1秒（絞り優先自動露出・露出補正+0.3）

コメント：今号では寺院つながりということで、表紙には、県指定天然記念物の白藤で知られる燕市の安了寺の夕景を、裏表紙には国指定重要文化財の三重塔で知られる胎内市の乙寶寺の雨上がりを題材としました。

安了寺の白藤は、樹齢推定350年といわれ、幹のまわりは7m以上、枝の張りは東西で約30m、南北で約20mに及ぶ巨木です。毎年5月頃、無数の優美な白い花房が垂れ下がり、甘く高貴な香りが漂ってきます。花にも増して提灯にも見所があり、今回はあえて夕景色で主役の白藤はほとんど見えない条件で、居並ぶ提灯のぼんやりとした灯りで非現実的な風景に仕上げてみました。手前の田植え前の田んぼに反射して幻想的になったかと思えます。レンズは広角端で絞り開放にしていますが、カメラの手ぶれ補正に助けられています。

乙寶寺は、奈良時代の天平8年（736年）に聖武天皇の勅命によって行基菩薩と波羅門僧正が開山したとされ、「今昔物語集」や「古今著聞集」などに伝承がしるされているようです。もともと、婆羅門僧正がインドよりもたらした仏陀の左眼を納めたことから、「乙寺」と名付けられたとされています（中国には右眼を納めた「甲寺」があるとのこと）。三重塔は、村上城主の村上忠勝が願主となり、慶長9年（1614年）に起工し、元和6年（1620年）に村上城主の堀丹後守直奇のときに完成したとされる純和様建築です。今回は梅雨の雨上がりの紫陽花を前景に建物にピントが合うように撮影してみました。多少前景がボケるよう、表紙と同様にレンズは広角端で絞り開放にしています。

本誌中の写真の使用機材

ボディ：OLYMPUS PEN-F, OLYMPUS E-M5 Mark II, OLYMPUS PEN E-P5
レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0

撮影者：林 孝文

歯学部ニュース

令和5年度第1号（通算143号）

発行日 令和5年9月29日
発行 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 岸本 直隆、寺尾 豊
編集委員 小田島あゆ子、小林 太一
笹川 祐輝、外園 真規
印刷所 (株)ウィザップ



リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。